

平成 28 年度 研究紀要

研究主題

豊かに学ぶ子どもを育てる
～読む能力の高まりを目指して～

平成 29 年1月

大阪市立豊里小学校

目 次

I. 研究にあたって	-----	1
1. 研究主題		
2. 主題設定の理由		
II. 研究の概要	-----	2
1. 学年目標		
2. 研究の内容		
III. 研究の組織と経過	-----	5
1. 研究の組織		
2. 活動内容		
3. 研究の経過		
IV. 各学年・学級の実践		
1. 第1学年	「いろいろなふね」 -----	7
2. 第2学年	「ビーバーの大工事」 -----	17
3. 第3学年	「自ぜんのかくし絵」 -----	27
4. 第4学年	「ヤドカリとイソギンチャク」-----	35
5. 第5学年	「動物の体と気候」 -----	45
6. 第6学年	「イースター島にはなぜ森林がないのか」----	55
7. 特別支援学級	「買い物ごっこをしよう」 -----	63
V. 研究のまとめと今後の課題	-----	69

I 研究にあたって

1. 研究主題

豊かに学ぶ子どもを育てる
～読む能力の高まりを目指して～

2. 主題設定の理由

本校の研究主題は、「豊かに学ぶ子どもを育てる」である。この豊かに学ぶ子を、

- ・自信をもって学習に取り組む子。
- ・主体的に取り組むことのできる子。
- ・学び続けることのできる子。

とする。

また、本校の教育目標は、「豊かな人間性とたくましく生きる力を育てる教育実践を推進する」である。校訓には、次の3点をかけている。

- ・ねばり強い子
- ・よく考える子
- ・明るい子

このような児童の育成に向け、「わかる」「できる」「楽しい」授業の創造が求められる。この目標を達成するために、本校では、研究教科を昨年度より国語科とした。国語科で培われる言葉の力は、各教科で言語活動を充実させるのに基礎的基本的な技能として大切なものである。そのような言葉の力は、豊かに学ぶ子どもを育てるうえで大きな支えとなるものと考ええる。

また、本校では、昨年度の「全国学力・学習状況調査」において、「国語の学習が好きですか」という問いに「当てはまる」「どちらかといえば、当てはまる」と答えた児童が、「全体の51.7%にとどまっている。これは、昨年度だけに限ったことではなく、これまでの全国学力学習状況調査」からも同じような傾向がみられた。そこで、まずは、児童の「国語が好き」を増やすために、言語活動を通して、児童の興味・関心をてこに、児童が意欲をもって主体的に取り組める単元設定の工夫が求められる。

授業を構想するにあたっては、目的に応じて読み、そこで得た知識や技能を生かし、表現してみることで、学んだ言葉の力が必要な場面で活用できるようにと考えた。そのようにして自分の学びを実感することは、学習したことへの自信にもつながる。また、このような経験の積み重ねが、学び続けるために必要な言葉の力を育んでいくことになる考える。

Ⅱ 研究の概要

1. 学年目標

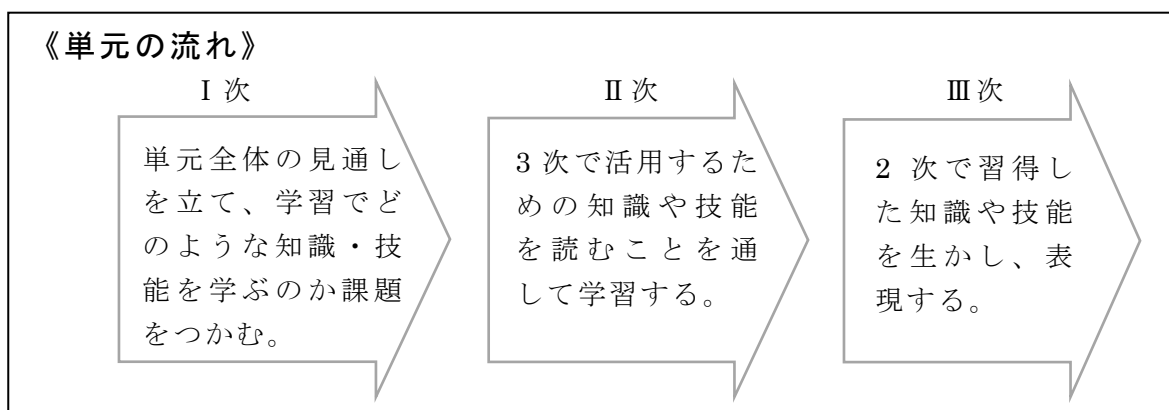
今年度は、「C読むこと」の説明的文章を重点教材とした。そして、定着させたい知識や技能を明らかにするため、学習指導要領の指導事項を踏まえ、年間を通しての低・中・高学年の目標を以下のように設定した。

低学年	・書かれている事柄の順序を考え、内容の大体を読むことができる。 ・楽しんで読書をしようとする態度を育てる。
中学年	・中心となる語や文をとらえて、段落相互の関係に着目して読むことができる。 ・幅広く読書をしようとする態度を育てる。
高学年	・文章の内容を的確に押さえ、自分の考えを明確にしながら読むことができる。 ・読書を通して考えを広げたり深めたりしようとする態度を育てる。

2. 研究の内容

(1) 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

単元を構想するにあたっては、教材文分析と児童に付けたい力とを勘案し、児童の興味・関心を引き付けられるような言語活動となるようにする。更に、教材文を読むことで得た基礎的・基本的な知識・技能を基に、それらを活用して表現活動へと展開していくように工夫した。例えば、文章の構成や表現方法、作者のテーマ性など、表現活動を行ううえで必要な技能や知識を習得するために読む。そして、学んだ知識や技能を使い、自分の言葉で表現していくというものである。また、学習活動を通してどのような言葉の力を学ぶのかということを、児童自身も課題としてつかめるように指導者が作成した作品のモデルを提示し、学習の見通しをもたせたり、学習の流れが分かる掲示物を作成し、提示したりした。以上の考えに沿う単元の流れは、次の図の通りである。



(2) 基礎的基本的な知識・技能の習得

・学習環境の整備

「声のものさし」、姿勢、話すこと・聞くことの約束、ハンドサイン、話型を全校で統一して作成し、掲示した。また、学習した基礎的基本的な知識や技能について、読むこと

に関わる主な内容を掲示し、必要なときに振り返ることができるようにした。

さらに、児童が日常的に、本に親しむことができるよう、当該学年の国語科の教科書に取り上げられている本を中心に学年に応じた本を選び、各教室近くにブックトラックを利用して常置した。

〈ハンドサイン〉

グー・・・違う意見 パー・・・同じ意見 チョキ・・・付け足し 一本指・・・質問

〈話すこと聞くことの約束〉

あ	相手を見て	か	顔は相手の方に
い	意見をくらべ	き	聞こえる声で
う	うなずきながら	く	口を大きくあけ
え	え顔で	け	結論から
お	終わりまで	こ	言葉ははっきり
	聞こう		話そう

〈話 型〉

低	意見発表	はい・・・です。（・・・だと思います。）
	同じ意見	〇〇さんとおなじで・・・です。
	違う意見	〇〇さんとはちがって・・・です。 どうしてかというところ・・・だからです。
	質 問	・・・がよくわからなかったの、もう一度せつめいしてください。 ・・・って、何ですか。

中高	意見発表	☆ はい・・・です。（・・・だと思います。） ・ どうしてかというところ・・・だからです。
	同じ意見	☆ 〇〇さんと同じです。 ・ それは～だからです。 ・ ～（の資料）に～とあるからです。
	違う意見	☆ 〇〇さんと（少し）ちがって・・・です。 どうしてかというところ～だからです。 ～（の資料）に～とあるからです。
	付け加え	☆ 〇〇さんに付け加えて～です。
	質 問	☆ 〇〇さんに質問します。どうして・・・なのですか。 ☆ ～がよくわからなかったの、もう一度説明してください ☆ ～って、何ですか。
	考えを変える	☆ 私は～と思っていましたが、〇〇の考えを聞いて、～と考えるようになりました。
	考えを比べる	☆ 〇〇は～だけど、△△は～だから、～だと思います。

・意見交流を活性化させるための指導方法や指導材の工夫

読み取ったことや考えたことを交流する場を設定した。児童が話し合いを通して、自分の考えとの違いや読み方の違いに気づくとともに、必要な情報を取り出し、自分の考えを広げていくことができると考えたからである。場の設定に当たっては、交流の形態を児童の実態や学習場面に応じて、適切に選択することが大切となる。例えば、話すことで自分の意見を整理したり、緊張感が緩和された状態で話したりできるようにする場合には、ペア交流、グループ交流が適している。また、全体交流など多数の友達で交流すると、異なる意見や自分とは違う視点での意見交流ができ、視野が広がるなど相互作用を通じての学びの機会につながりやすい。このように、それぞれの意見交流のよさを考慮し、効果的に1時間の学習の中へ取り入れていくようにした。

交流を有効なものとするためには、自分の考えをもって参加することが大切である。そのために、ワークシートやシンキングツール¹などの指導材の工夫にも取り組んだ。シンキングツールとは、頭の中にある情報を具体的なかたちにして書き込むための簡単な図形の枠組みのことである。(具体例は、実践事例を参照) 思考を視覚化することで、教材文や本から取り出した情報を取捨選択したり関連付けたりするときなどに、考えた事を整理しやすくなると考えたからである。

・学習課題を基にして学びを振り返ることができる評価方法や場の工夫

学習活動の中での評価の方法や場を工夫することにより、児童それぞれが、その時間の学習課題を意識できるようにしていった。そして、課題が達成できたかどうか自己評価することにより、次の学習に向けた自己の課題も意識されるものと考えた。また、友達と相互評価し合い、互いの良さや足りない点に気づくことで、互いに学び合う態度を育てるとともに学習の達成感や充実感を味わえるようにした。さらに、これら学習課題と一体となった評価は、指導者の資料としても活用できるものと考えた。

(3) 図書の計画的な活用

読書量の充実が読む力の伸長にもつながると考え、各教材での学びをより確かで豊かなものにするために、多読にひらく活動を単元計画の中に位置付けた。図書を選定するにあたっては、必要に応じて、東淀川図書館とも連携し、団体貸し出しの利用も行うようにした。



「絵本ばたけ」の様子

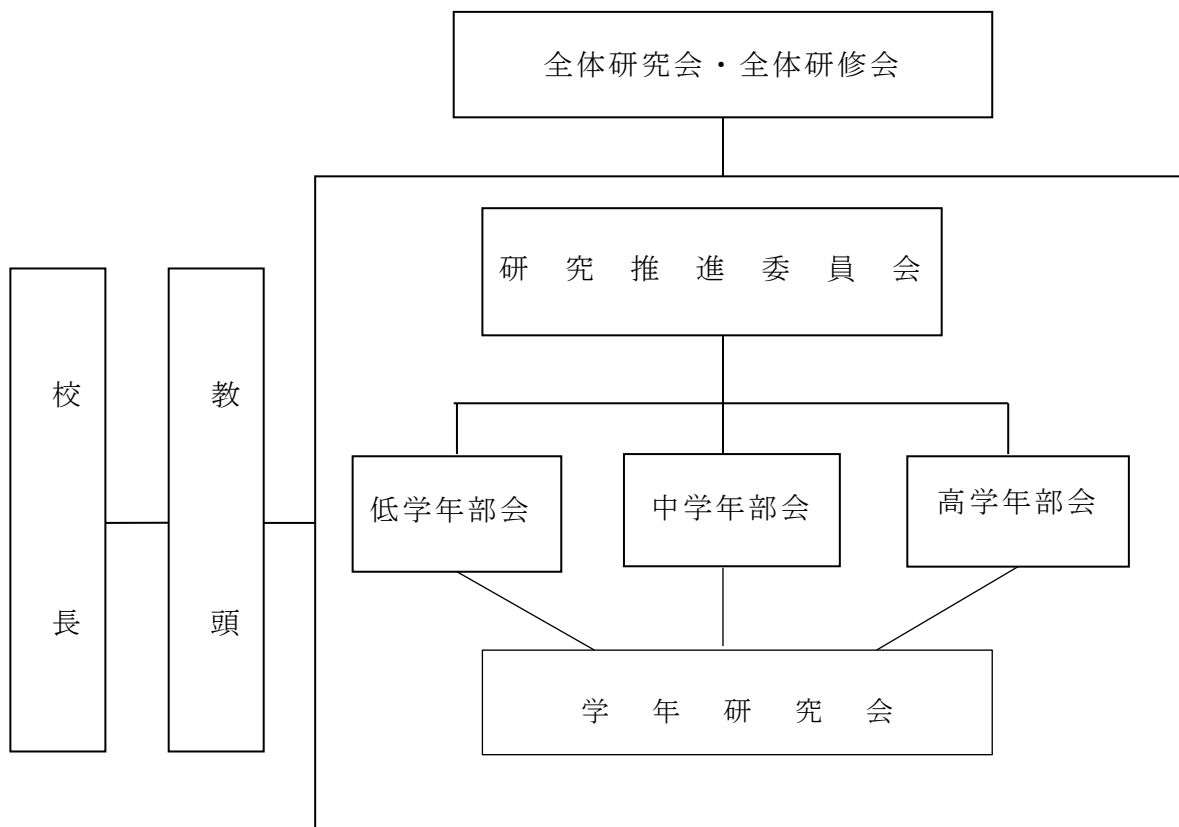
また、朝の「読書タイム」の設定や「自動車文庫」の利用、学年毎の関連図書の配置など、常に児童が本に親しめるような場作りを行った。更に、地域や保護者と連携した読み聞かせ「絵本ばたけ」や、図書委員会の児童による絵本や紙芝居の読み聞かせを行い、本に親しむ機会を増やしていくようにした。

このようにして、図書の計画的な活用を図るようにした。

注・¹ 関西大学初等部 『思考ツールを使う授業』さくら社 2014.2 を参考に作成

Ⅲ 研究の組織と経過

1. 研究の組織



2. 活動内容

- 全体研究会
 - ・ 研究授業・研究討議会
各学年及び研究推進委員会で検討・作成された指導案により、各学年 1 名の代表者が授業を行い、全員が参加する。授業後、研究討議会において、実践についての指導法や指導計画を振り返り、成果と問題点を整理し、今後の授業研究の課題を明らかにする。
- 全体研修会
 - ・ 本校の課題や研究内容について全員で共通理解を深め、指導力の向上に努める。
(児童理解・人権教育・事例研修など)
- 学年研究会
 - ・ 研究主題をもとに各学年の研究計画を立て、授業を通して指導法を工夫する。
 - ・ 隣接する 2 学年が連携し、日常の授業研究や指導法を工夫できるようにする。
- 研究推進委員会
 - ・ 研究部長、各学年 1 名の代表者、教務主任、教頭、校長で組織する。
 - ・ 研究内容を明らかにし、主題に関わって研究の方向性を示す。
 - ・ 指導案の検討や資料の収集・整理にあたり、各学年の実践記録をまとめる。
- 若手研修会
 - ・ メンターを中心に、5 年目までの若手教員で組織する。基本的な指導法や各自の課題について交流し、研鑽する。

3. 研究・研修の経過

月	研究会・研修会	研究・研修の主な内容
4	全体研修会 研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 研究内容の共通理解 研究の組織と年間研究計画の作成
5	人権教育研修会 実技研修会 研究推進委員会 授業研究会・討議会	<ul style="list-style-type: none"> インクルーシブ教育 スポーツテストの実施について 高学年指導案検討 6年「イースター島にはなぜ森林がないのか」
6	人権教育研修会 研究推進委員会 安全教育実技研修会 授業研究会・討議会 研究推進委員会 メンター研修会	<ul style="list-style-type: none"> 児童理解 高学年指導案検討 救急救命法 5年「動物の体と気候」 中学年指導案検討 指導力向上のために
7	授業研究会・討議会 実技研修会	<ul style="list-style-type: none"> 4年「ヤドカリとイソギンチャク」 国語科学習指導研修
8	研究推進委員会 研究推進委員会 実技研修会 全体研修会	<ul style="list-style-type: none"> 中学年指導案検討 低学年指導案検討 音楽科研修 夏季研修等伝達講習
9	研究推進委員会 人権教育研修会 授業研究会・討議会	<ul style="list-style-type: none"> 4～6年研究紀要検討 区人権教育講演会 3年「自然のかくし絵」
10	授業研究会・討議会	<ul style="list-style-type: none"> 2年「ビーバーの大工事」
11	授業研究会・討議会 全体研修会 人権教育研修会 人権教育研修会 研究推進委員会 実技研修会	<ul style="list-style-type: none"> 1年「いろいろなふね」 「協働的に学ぶ学習」についての伝達講習 インクルーシブ教育 区人権教育実践交流会 3～1年研究紀要検討 ICT研修
12	研究推進委員会 実技研修会	<ul style="list-style-type: none"> 区教員研究発表内容検討 ICT研修
1	全体研修会 東淀川区教員研究発表会	<ul style="list-style-type: none"> 区教員研究発表会リハーサル 東淀川区教員研究発表
2	実技研修会 メンター研修会	<ul style="list-style-type: none"> 外国語活動研修 授業改善に向けた交流会
3	人権教育研修会 人権教育研修会 研究推進委員会	<ul style="list-style-type: none"> 児童理解 インクルーシブ教育 次年度の研究について、新年度の計画

第1学年の実践

国語科学習指導案

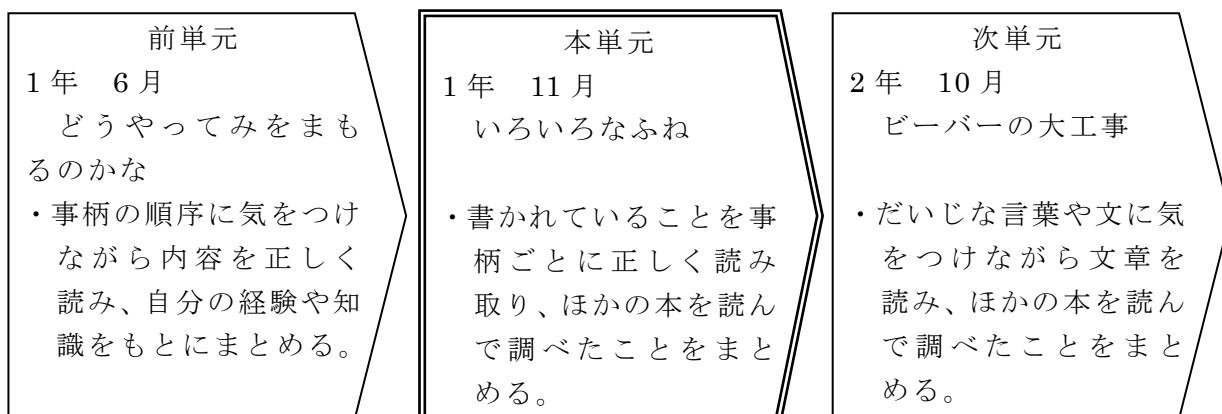
指導者 尾小谷 純也

日 時 平成28年11月2日（水）第5校時（13：45～14：30）

学年・組 第1学年1組（在籍29名）

単 元 のりものについてかかれた本をよんで、「のりものブック」をつくろう
（「いろいろなふね」 東京書籍 1年下）

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- 乗り物について書かれた本や文章に関心をもって読み、意欲的に説明的な文章に書き表そうとする。
- ・ 事柄の順序に気をつけて、内容の大体と文章の構成を読み取ることができる。
 - ・ 乗り物について書かれた本や文章を選んで読むことができる。
 - ・ 順序を考えながら、乗り物について、説明する文章を書くことができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
・ 乗り物に興味を持って、本や文章を読んだり、好きな乗り物について調べたりしようとしている。	・ 事柄の順序に気をつけて、内容の大体と文章の構成を読み取っている。 ・ だいたいな言葉や文を見つけながら文章を読んでいる。 ・ 好きな乗り物を調べるために、乗り物について書かれた本や文章を選んで読んでいる。	・ 乗り物の特徴が伝わるように、語と語とのつながりを意識しながら、文章に書くことができる。	・ 主語と述語の関係に注意して文章を読んでいる。

4. 指導にあたって

【児童観】

本学級の児童は、読書に意欲的に取り組んでいる。1学期に配布した読書ノートを用いて、読書記録をつける児童も多い。しかし、感想の欄を見ると「おもしろかった」というような感想が多く、何が面白かったのかを聞いても、的確に答えることができる児童は少ない。それは、内容をしっかりと理解していないからであると考ええる。

6月に説明文「どうやってみをまもるのかな」を学習した際には、音読を十分に行っていたこともあって、それぞれの動物がどうやって身を守るのか、楽しく動作化をすることはできた。しかし、内容の理解が十分ではないので、教材文を読んで、自力でボーン図にまとめる際には、まとめた内容がどこに書かれているのかを探ることができない児童、どのように書けばよいのか分からなくて戸惑う児童もいた。だが、教科書以上の内容について、もっと知りたいという気持ちは強く、意欲的に質問をする姿が見られた。Ⅲ次では「どうやってみをまもるのかなぶっく」を作った。ダンゴムシやカタツムリ、タコなど、児童になじみの深い生き物が、どのようにして身を守るのかを学級全体で話し合いながらボーン図を使ってまとめ、教材文と同じ形式の説明文にまとめた。この活動では、話し合いながらボーン図に書き表したこともあって、誰もが意欲的に活動することができ、それぞれが複数の生き物についてまとめることができた。ここでは、自分の知っていることをクラス全体で共有したため、自分で本を読んで、必要な情報を取り出すということは行っていない。

本単元の学習を通して、しっかりと本や文章を読み、内容の大体をとらえるとともに、大事な言葉や文がどこに書かれているのかを見つける能力を養っていききたい。

【単元観】

児童の実態を受け、付けたい言語の力を「C読むこと」の指導事項Ⅱ「時間的な順序や事柄の順序などを考えながら内容の大体を読むこと」、指導事項オ「楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと」とする。この力をつけるために、本単元では「乗り物について書かれた本を読んで、『乗り物ブック』を作る」という言語活動を位置付ける。

本教材は、「始め」「中」「終わり」の3つから構成されており、1年生にとっても分かりやすい構成であるとともに、説明文の典型的な文章構成となっている。

1段落が1文で構成されており、4つの例はいずれも、役目を述べている段落、構造や装備などについて述べている段落、機能、すなわち、構造や装備などでできることを述べている段落から構成されている。よって、一つ一つの例がどのように述べられているのかをボーン図にもまとめながら学習していくことで、文章の構成について容易に気付くことができる。

この単元ではボーン図というシンキングツールを用いる。これは、文章の構造を把握するのに適したシンキングツールであり、魚の頭、3つに分けた魚の胴体からなっている。魚の頭の部分に「船（乗り物）の名前」を書き、胴体をそれぞれ「何のための船（乗り物）か」「そのためにどんな構造や装備があるか」「それで（そこで）できること」を書くようにする。これは、前述したように、教材文の構成と同じである。それゆえ、どの船についても、同じ構成で書かれていることを視覚的に理解できると考える。

また、並行読書を行いながら、自分の興味のある乗り物を見つけていく。第Ⅲ次では、興味のある乗り物を、学習したボーン図にまとめ、説明文に書く。児童が書いた説明文は、学級の人数分印刷して「のりものブック」として配布する。

このような学習活動を行うことによって、付けたい言語の力を習得させていく。

【指導観】

I 次では、学習の見通しをもつために、指導者が作成した「のりものブック」の見本を提示する。前単元でも、似たようなことを行っているのので、児童も、興味をもつことができるのではないかと考える。その後、文章構成にも目を向けさせ、どの船のことが、どこからどこまでに書かれているのかを話し合う。これに並行して、自分の興味のある乗り物を探ることができるように、乗り物の本コーナーを設置し、並行読書にも取り組むようにする。

II 次では、実際に教材文を読み進めていく。

客船について読む際には、ボーン図の使い方を復習し、どこにどのようなことを書くのかを理解できるようにする。この時、「～をするためのふねです」「～には…があります」などの言葉に着目させる。それぞれが役目、構造を示していることや、その船が持つ構造や装備などを用いてできることが書かれているということに気付かせる。ここでは、教材文を拡大して掲示し、指導者が色を分けてラインを引くことで、どの船も同じ文章の構成になっていることに気付くことができるようにしたい。ボーン図にまとめる際には、大事な言葉や文は何かを見極め、常体で書くことができるようにする。客船の写真をたくさん用意し、客船について知っていること、乗った（見た）経験があるかなどについて話し合いたい。そうすることで、船に対する興味関心を強めたい。

本時ではフェリーボートを学習する。客船とは違って、乗った経験がある児童が多いと考えられるので、生活経験と結びつけながら学習を進めていきたい。「きゃくしつや車をとめておくところがあります」という記述があるものの、それに関する写真が少ないので、想像を広げにくい。そこで、フェリーボートに関する写真をたくさん用意し、乗ったことのない児童も、見て分かるように支援したい。客船と同じように、ボーン図を使ってまとめていくが、その後には、ペアトークを行うようにする。隣の児童と自分が書いたものを見せ、説明しあう活動を行うことで、自分の考えを深めたり、訂正したりする時間を確保したい。ペアトークの後、全体で交流する。全体で交流する際には、どの言葉に着目したのか、どの形式段落に書かれているのかを一つ一つ確認する。そうすることで、客船と同じ書きぶりであることに気付かせたい。

漁船と消防艇も同様に学習を進めていくが、文章の構成は同じであるので、児童それぞれが、自分の力でまとめていくことができるようにする。

III 次では、自分の興味のある乗り物を選んで、「のりものブック」を作る。興味のある乗り物が「何のための乗り物か」「そのためにどんな構造や装備があるのか」「それで（そこで）何をするのか」という三つの観点でボーン図にまとめる。その後、教材文と同じ文章構成で、その乗り物について説明する文章を書く。学級全体で読み合って修正した後、「1年1組のりものブック」として、全員分を印刷し配布したい。

5. 学習指導計画（全 11 時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
I 次	1	○ 全文を通読する。 ○ 「のりものブック」を作るという	・ 全文を通読し、どのような船について述べられているのかを理解できるようにする。 ・ 指導者が作成した「のりものブック」を提示することで、学習の見通しをもつことができるようにするとともに、III 次での例となるようにする。

	2	<p>学習の見通しをもつ。</p> <p>○ 全文を形式段落に分け、それぞれの船がどの段落に書かれているのかをまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 形式段落に番号をふり、それぞれの船がどの段落に書かれているのかをつかむことができるようにする。 また、教材文全体の構成についても、捉えることができるようにする。 乗り物の本コーナーを設置し、並行読書をするようにする。
II 次	3 4 本 時	<p>○ 客船について書かれた段落を読み、ボーン図にまとめる。</p> <p>○ フェリーボートについて書かれた段落を読み、ボーン図にまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ボーン図とは何かを振り返り、書かれていることを観点別にまとめていくようにする。 客船に乗ったことがあるかなど、児童の体験などについて問い、客船がより身近なものと感じられるようにする。また、写真をたくさん用意し、イメージをつかむことができるようにする。 拡大した教材文に、指導者が色を分けてサイドラインを引くことによって、それぞれの形式段落に書かれていることが何かを把握できるようにする。 ボーン図に観点別にまとめる。この際、前時に学習した文章の構成を想起させるようにする。 観点別にまとめていく中で、フェリーボートについて話し合う。このとき、写真をたくさん提示し、イメージを深めることができるようにする。
	5 6	<p>○ 漁船、消防艇について書かれた段落を読み、ボーン図にまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 客船、フェリーボートと同じ構造をしているのではないかという見通しをもたせ、漁船・消防艇についてまとめる。 前時までと同様に、写真を用意し、イメージを広げることができるようにする。
III 次	7 8 9 10 11	<p>○ 「のりものブック」に書く乗り物を決める。</p> <p>○ 興味のある乗り物を選び、ボーン図にまとめる。</p> <p>○ 説明文を書く。</p> <p>○ グループで校正する。</p> <p>○ 「のりものブック」を読み合う。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 並行読書してきた中から、どの乗り物について「のりものブック」に書くのか、振り返ることができるようにする。 並行読書してきた乗り物についての本や文章から、一番興味のある乗り物を選び、ボーン図にまとめる。 教材文の構成を用いて、乗り物を説明する文章を書く。 ヒントカードを用意し、支援が必要な児童に配布することができるようにする。 それぞれが書いた文章を読み合い、校正をすることができるようにする。 完成した「のりものブック」を読み合い、いろいろなものの見方や感じ方があることに気付くことができるようにする。

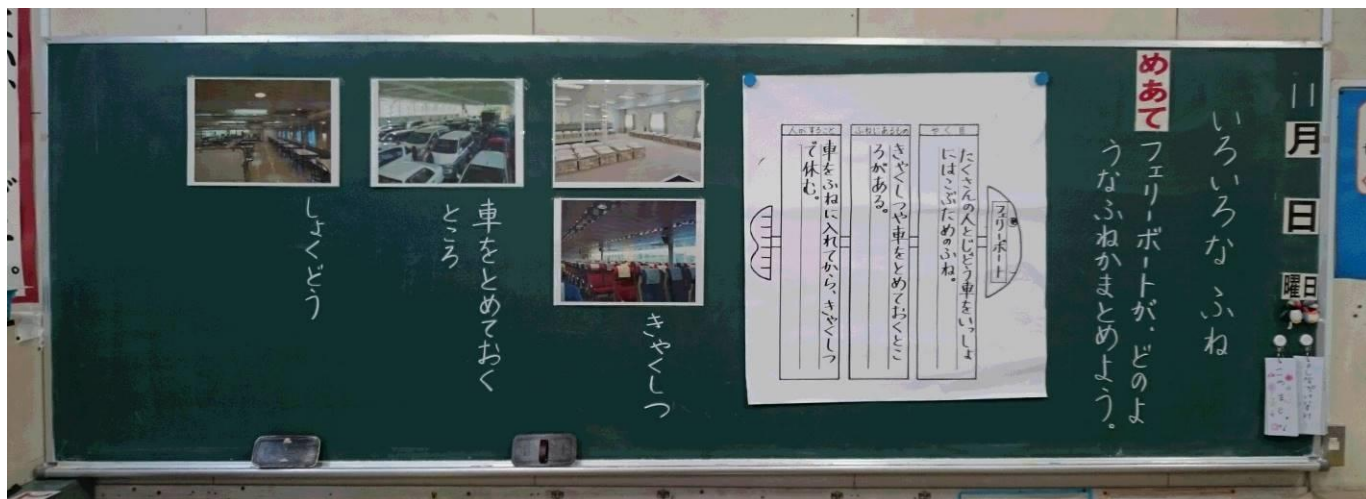
6. 本時の学習

① 本時の目標

- ・フェリーボートについて書かれているところを読み、ボーン図にまとめることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 本時の課題を確認する。	▼ 本時の課題を板書し、全員で読んで確かめる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: 60%;"> フェリーボートがどのようなふねか、まとめよう。 </div>	
2. 教材文を読む。	○ フェリーボートがどのような船か書かれているところに注意しながら、教科書を読みましょ
3. フェリーボートがどのような船か、ボーン図を用いてまとめる。	<p>★ 教科書を見ながら、フェリーボートがどのような船なのか、お魚図にまとめましょ。</p> <p>◎ 客船が、どのような順で書かれていたのかを思い出しながら、まとめましょ。</p>
4. 書いたことを交流し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・ ペアで ・ 全体で 	<p>○ どのようなことを書いたのか、隣の人と話し合いましょ。</p> <p>▼ まずは右側の児童から発表させ、その後、左側の児童が発表するようにする。発表を通して、書き直したり、書き加えたりすることができるようにする。</p> <p>▼ 写真と対応させながら、どこのことを説明しているのか、把握することができるようにする。</p> <p>▼ フェリーボートに乗った経験や、見た経験などを問い、どのような船なのかを身近に感じることができるようにする。</p> <p>▼ できるだけ、写真を用意し、イメージを膨らませやすいようにする。</p> <p>▼ 教科書を拡大したものを用いて、述べられている順が明確になるようにする。</p>
5. まとめの音読をする。	▼ 本時の学習内容を振り返りながら、音読をするようにする。
6. 評価をする。	<p>○ フェリーボートについて、自分でまとめることができたかを、◎○△で評価ましょ。</p> <p>{評価}</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ フェリーボートがどのような船か、ボーン図にまとめることができたか。



7. 指導を終えて

(1) 学年の取り組み

本学年では、以下の3点について重点的に取り組んできた。

1点目は、教材文に書かれている言葉をきちんと理解し、語彙を増やすことができるような学習計画の立案である。例えば、物語文「サラダでげんき」では、「たちまち」や「のっそり」、「せかせか」などの言葉に着目し、意味を前後の文章から推測して話し合ったり、動作化したりすることを通して、意味理解を図ってきた。また、挿絵や写真も、言葉を理解する上で欠かせないものであると気付くようにしてきた。その結果、児童は、説明文・物語文どちらであっても、文章の内容を把握するために、文章をしっかりと読み、写真なども注意して見ることができるようになりつつある。

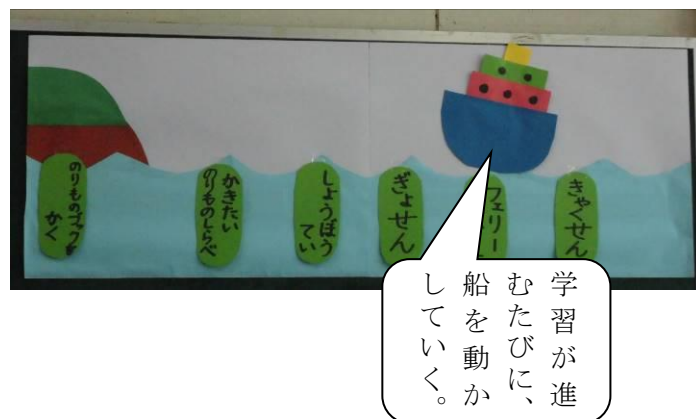
2点目は、自分の意見を述べることができるような支援である。全校で、ハンドサインや話型を統一していることもあり、本学年でも、これらを用いて、自分の意見をしっかりと相手に伝えることができるように指導してきた。これらはすっかり定着し、使いこなすことのできる児童も増えてきている。また、ペアトークをどの教科の学習でも取り入れてきた。隣の児童と自分の意見を交流することで、不安を取り除き、全体交流に臨めると考えたからである。ペアトークの際には、「ここが違うね」とか「同じだね」、「どうしてそう考えたの」とそれぞれの意見に対して、気付いたことを述べたり、質問したりするようにした。このことを通して、自他の読みには相違点や共通点があることを実感できるようになった。

3点目は、読書に広げることができるような言語活動の設定である。「サラダでげんき」では、学校の図書室から借りてきた同一作者の本を紹介したり、「おとうとねずみチロ」では、図書館の団体貸し出しで関連の本を用意したりした。また、本単元の「いろいろなふね」では、乗り物に関する本を用意し、並行読書をした。いつも近くに本があり、いつでも手に取ることができるようにしたことにより、読書に親しむとともに、自分の興味のある本を選ぼうとする姿が見られるようになった。

(2) 本実践の考察

- 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

本単元では、「のりものブック」を作るといふ言語活動を設定した。指導者が作成した「のりものブック」を児童は興味をもって見つめ、「僕も作りたい」とつぶやく児童も多数いた。その後、学習の見通しを立てる際には、学習の過程を掲示するようにした。1時間の学習を終えた時には、船が先に進むようにしたので、児童は、「次はこんな学習をするんだな」と見通しをもつとともに、楽しみながら学習を進めることができた。(資料①)



(資料① 学習の見通しをもつことができるような掲示物)

それに加えて、船の写真や映像を多数用意したことで、どの船についても、教科書の範囲を超えて学習することに、思わず身を乗り出してしまう児童がいるほど意欲的だった。

「のりものブック」を書き始める際には、児童は目を輝かせていた。普段は、写真や挿絵だけで満足している児童も、自分が欲しい情報はどこに書かれてあるのかを必死に探す姿が見られた。

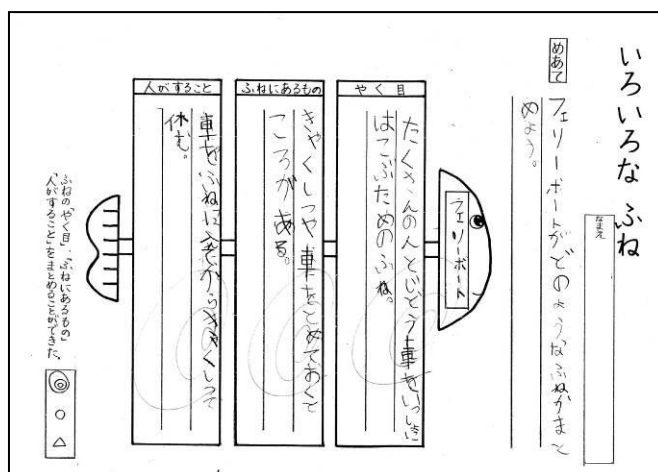
○ 基礎的基本的な知識・技能の習得

意見交流を活性化させるために、1時間の学習の中で、ペアトークを2回行った。(資料②) 初めは隣の児童と、次には、前後で話し合うようにした。こうすることで、自分の意見をより意欲的に発表することができた。また、教材文に関連する写真を多数用意することで、写真から気付いたことやどの船に乗ってみたいかなどを話し合う際の手掛かりとなった。話し合い活動では、ハンドサインや話型を用いるようにした。4月から継続して指導を行ってきているので、話型を用いて、きちんと自分の意見を述べることもできるとともに、意見交流の際に、互いの意見の同じところ、違うところを意識することで、話し合いが深まった。「のりものブック」を作るために、乗り物の「役目」、「中にあるもの」、そこで「人がすること」をまとめられるように、ボーン図を用いた。(資料③)



(資料② ペアトークの様子)

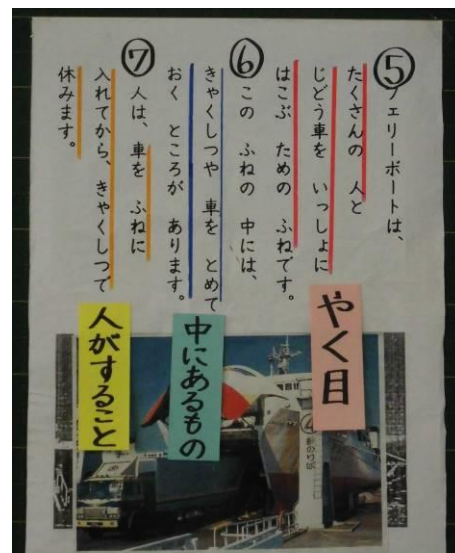
前単元でもボーン図を用いていたため、児童は、戸惑うことなく、乗り物についてまとめることができた。また、



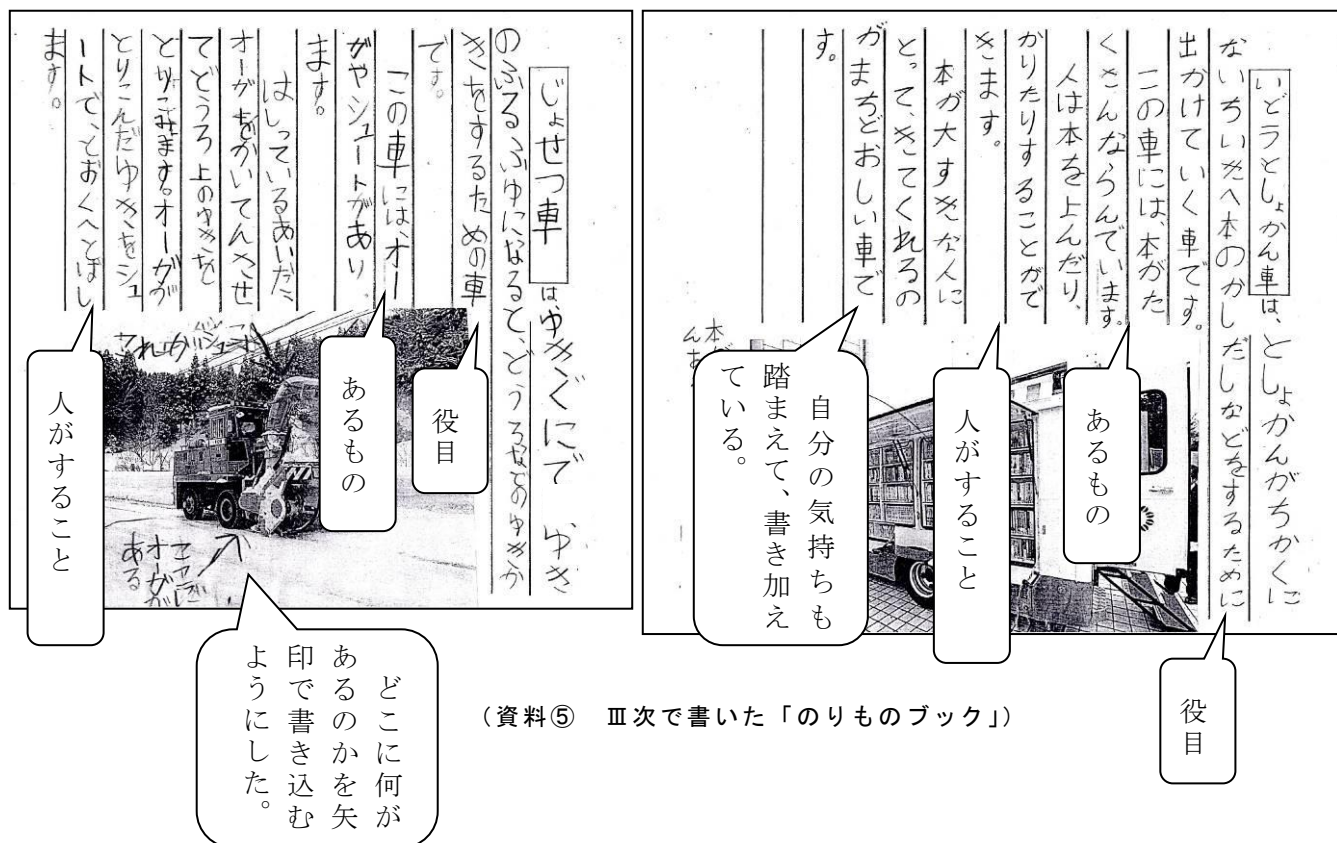
(資料③ 児童が用いたボーン図)

毎時間同じものを使って学習するため、苦手意識をもっていた児童も少しずつ書き方を理解し、自分の力でまとめることができるようになった。それに加え、拡大した教科書に、指導者が色分けしながらラインを引くようにしたことが、事柄の順序を理解する上で効果的であった。(資料④) 児童は、客船やフェリーボートを学習し終えた後には、サイドラ

インの色の並び方が一緒だということに気付いた。そこで、それ以降の学習では、ほかの船も、同じような順番で書かれているのだろうかという視点で読むようにした。その結果、漁船や消防艇も同じ書きぶりであることが分かり、よりまとめやすくなった。また、順番以外にも共通していることはないかを探す活動も行った。船にあるものは常に二つ書かれているということを見つけさせたかったからである。それがつけられた後には、なぜ二つずつ書かれているのか、なぜ一つではいけないのかという点についても考えた。児童からは、一つよりは二つ書いた方が分かりやすいという意見が出たので、実際に「のりものブック」を書く際にも、なるべく、「その乗り物にあるもの」には二つのものを書くようにした。「のりものブック」を作る際には、同じ乗り物を選んだ児童同士、教え合ってもよいことにした。声をかけ合ってまとめることで、戸惑いも少なく学習を進めることができた。Ⅲ次で作成した「のりものブック」は以下のようなものである。



(資料④ 色分けしたサイドラインを引いた教科書の本文)

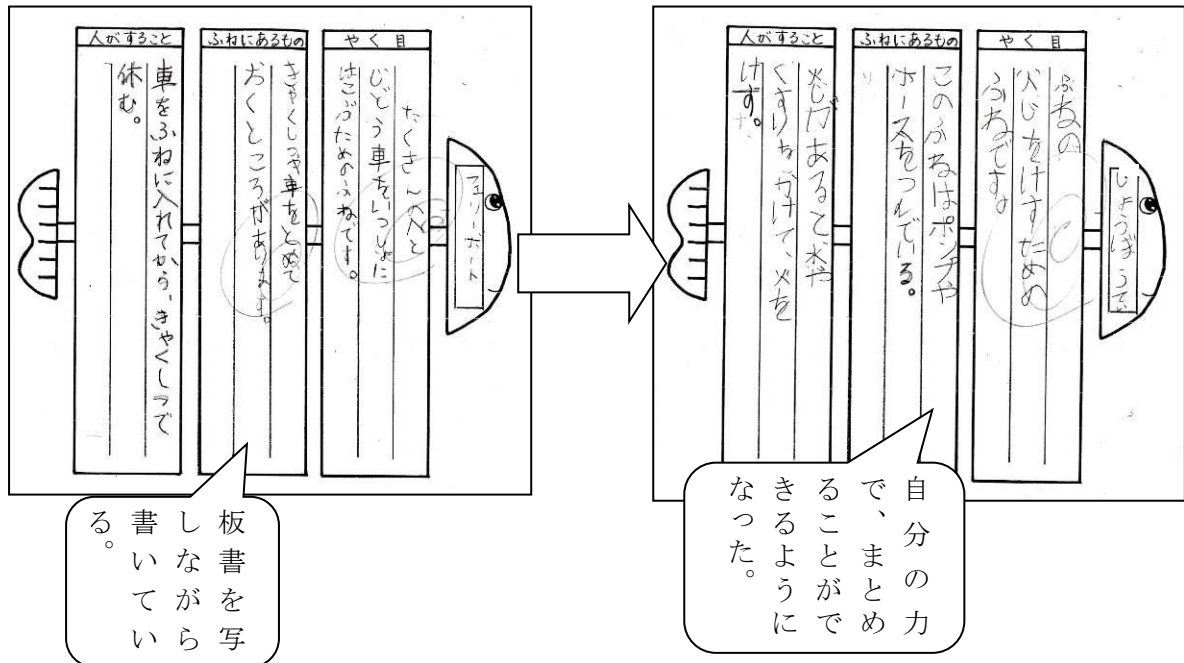


(資料⑤ Ⅲ次で書いた「のりものブック」)

どの児童も、「役割」「あるもの」「人がすること」を分けて説明文を書くことができた。どの部分に、自分が説明しているものがあるのかも、写真の横に書き込むようにしたので、読み手が、何のことを言っているのかがよく分かるようになった。右の児童のように、教材文にはないような一文を書き加えている児童もいる。こうすることで、より自分の伝えたいことが明確になった。

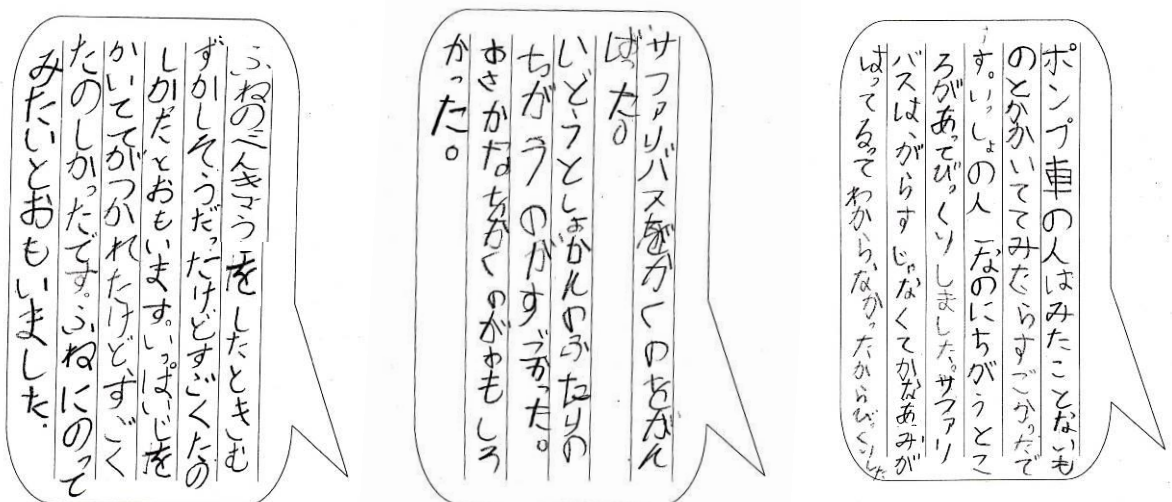
毎時間の授業の終わりには、ボーン図にまとめることができたかという観点进行提示し、自己評価を行った。1年生という段階でもあるので、◎、○、△という3段階で評価する

ようにした。おおむねきちんと自己評価を行うことができたのではないかと考える。△の自己評価をした児童に対しては、個別にアドバイスするなどして、学習に対する意欲が継続するように支援した。下のワークシートのように、初めは△評価だった児童が、学習が進むにつれて、○や◎の評価になり、「ちゃんとまとめられるようになったよ」と誇らしげに教えてくれるようになった。自己評価がよくなったことで、自己肯定感が増し、学習にも意欲的に取り組むことができた。



(資料⑥ 自己評価がよくなった児童のボーン図)

Ⅲ次で作成した「のりもののブック」を一人一冊配布したとき、学習を振り返って感想を書くようにした。児童のこの学習での感想は、以下のようなものであった。



(資料⑦ 児童の感想 左からA児、B児、C児)

A児のように乗り物に興味をもつことができた児童や、B児やC児のように、同じ乗り物であっても、得た情報によって、まとめ方が違うことに面白さを感じる児童もいた。読

書の時間にも、繰り返し、「のりもののブック」を読む児童もいるなど、「のりもののブック」を作る活動が効果的に働いたのではないかと考える。

○ 図書の計画的な活用

多読につなげるために、並行読書に取り組んだ。ここでは、「のりもののブック」を作るために、乗り物の本を多数用意して、写真のように「のりものの本コーナー」を作り、読書タイムや休み時間などに気軽に読むことができるようにした。(資料⑧) また、読んだ本は、お気に入りの本リストに記入し、その乗り物のお気に入り度数を星5段階で表すようにした。(資料⑨) これにより、Ⅲ次の活動で、興味のある乗り物をすぐに見つけ出すことができた。いつもは、本や図鑑の写真や絵だけを見て終わりにしている児童も、「のりもののブック」を作るために、本を隅々まで見て、自分の欲しい情報を探したり、本を読み比べて、情報を得たりしようとしていた。しかし、欲しい情報が、教材文のように、並列して述べられているわけではないので、情報を得ることが難しい児童もいた。



(資料⑧ のりものの本コーナー)

お気に入りののりもの見つけたよカード		
よんだ日	よんだ本とのりもののなまえ	お気に入り
10/31	本せいそう車いどうしゃが アイスクリームはんば車	★★★★★
10/31	本せいそう車いどうしゃが トイレカー	★★★★☆
10/31	本バスかろく バス	★★★★☆
10/31	本バスかろく サファリバス	★★★★☆
11/1	本せいそう車いどうしゃが いどうしゃいどう車	★★★★☆
11/1	本せいそう車いどうしゃが バイブレーション	★★★★☆
11/1	本バトロールカー、きょうりゅう車 いどうしゃ、たしゅ車	★★★★☆
11/2	本せいそう車いどうしゃが きんせんそく車	★★★★☆
11/2	本バトロールカー、きょうりゅう車 こうしゅきょう車	★★★★☆
11/	本 のりもの	★★★★☆

(資料⑨ お気に入りの本リスト)

8. 成果と課題

- 学習の流れを掲示し、それを少しずつ進めていくことで、今何を学習しているのか、何をするのかが理解できた。これにより、学習意欲を継続させることができた。
- ボーン図を用いて学習することで、何をどのようにまとめればよいのかが分かり、順序や構成を意識しながら読むことができた。
- 言葉にこだわって学習することで、それぞれが、イメージを深めながら読み進めることができた。
- ▲ 図書の活用はおおむねできたように思うが、欲しい情報が見つかりにくい本もあり、提示する図書の選別が必要だった。

第2学年の実践

国語科学習指導案

指導者 井上 正章

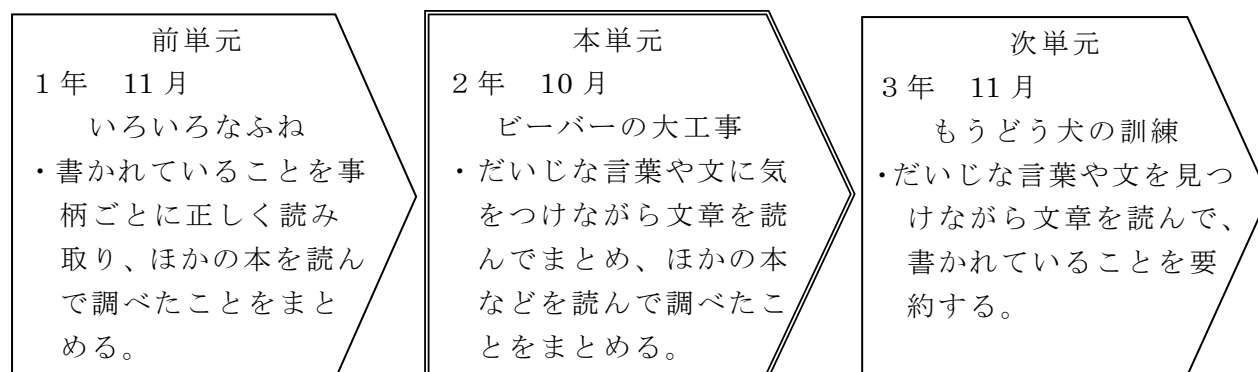
日 時 平成28年10月12日（水）第5校時（13：45～14：30）

学年・組 第2学年2組（在籍35名）

単 元 「どうぶつひみつブック」をつくろう

（「ビーバーの大工事」 なかがわ しろう 東京書籍 2年下）

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- ビーバーやほかの動物に関心をもち、進んで教材文や選んだ動物の本を読んで調べたことをまとめようとしている。
- ・ 事柄の順序、大事な言葉や文に気を付けて読むことができる。
- ・ 本や図鑑を読み、調べたことをまとめて「どうぶつひみつブック」に書くことができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
・ ビーバーやほかの動物に関心を持ち、進んで教材文を読んだり、本を読んで調べようとしていたりしている。	・ 事柄の順序に気を付けたり、だいたい言葉や文を見つめたりしながら、教材文を読んでいる。 ・ 「どうぶつひみつブック」を作るために必要な内容を見つめながら、選んだ本を読んでいる。	・ だいたい言葉や文を書き抜き、構成を工夫し、文章に書いている。	・ 「は」「へ」「を」の助詞を正しく使って「どうぶつひみつブック」を書いている。

4. 指導にあたって

【児童観】

児童は、1学期初めに学習した「たんぼぼ」で、大事な言葉（「キーワード」）を見つけながら、説明的な文章を読み取っていった。このとき、「題名に使われている言葉」「何度も繰り返し出てくる言葉」などが大事な言葉であることを知らせ、「キーワード」を探す手がかりにさせた。この学習では、多くの児童が、題名や繰り返し出てくる言葉に気を付けて読むことはできていたが、その言葉に気を付けて文章の内容を正しく読み取ることが難しい児童もいた。

「ふろしきはどんなぬの」では、「箇条書きのカード」と「本の文章」という二つの文章を読み比べ、同じところや違うところを見つける学習を通して読み取りをすすめた。大事な言葉は共通していることや、カードは大事な言葉を箇条書きにしていることを確認できた。しかし、ここで学習したことをもとにランドセルの文章を読んで内容をカードに箇条書きでまとめることが難しい児童もいた。

1学期末に行ったまとめのテストでも、多くの児童が、大事な言葉を選び、書き抜くことはできていた。また、半数以上は、それに気を付けて内容を正しく読み取っていた。しかし、順序に気を付けて文章を並べ替えたり、大事な言葉を使って自分の考えを表現したりすることには、課題があることが分かった。

目的に合わせて、大事な言葉や文を見つけながら読む力をさらに確かなものにすると共に、事柄の順序に気を付けて、内容を正しく読み取り、書きまとめる力を育てていきたいと考える。

【単元観】

児童の実態を受け、付けたい言語の力を「C読むこと」の指導事項エ「文章の中の大事な言葉や文を書き抜くこと。」指導事項オ「楽しんだり知識を得たりするために、本や文章を選んで読むこと」とする。

本単元の言語活動は、動物について書かれた本を一冊選び、興味をもった動物について知らせたい秘密を班で1枚の紙にまとめ、「どうぶつひみつブック」の1ページ分を書き、それを集めて「どうぶつひみつブック」にするというものである。この言語活動に向けて、Ⅱ次では、ビーバーのダムや巣作りなどについて読み取り、まとめていくという学習活動を行う。ここでは、大事な言葉や事柄の順序に気を付けて読み取り、ビーバーの工事が大工事であると分かるところを選ぶ。そして、内容毎に整理してまとめ、「どうぶつひみつブック」のビーバーの分を書き上げ、友だちと交流し合う。この一連の学習活動で習得した、順序や大事な言葉に気を付けて読むことやまとめ方を生かし、Ⅲ次の「どうぶつひみつブック」をまとめていくことになる。

本教材は、小見出し〈木を切りたおすビーバー〉〈ダムを作るビーバー〉〈巣を作るビーバー〉により、大きな三つのまとまりで構成され、ビーバーが川をせき止めてダムを作り、その内側に巣を作る過程が順を追って説明されている。その過程は題名にある「大工事」が示すように、ビーバーにとって時間や規模、労力を必要とする工事である。内容を読み取るさいには大工事に着目し、そのわけを見つけながら読むことにより、ビーバーの工事の様子を無理なく読み進められると考える。また、木を切るところやダム作りの方法を読むときには、順序に気を付けて読むことが必要となる教材である。

文中には、木の大きさや潜水時間などを数字で表したり、歯を「のみ」に、尾を「オール」にたとえたりしている。しかし、経験の少なさから2年生の児童には、分かりにくい子も多い。そのため、写真や絵が多く使われ、文章だけではイメージしにくいところが補

われている。このように、写真や絵から必要な情報を補いながら読むのにも、適した教材であると考えられる。

【指導観】

I次では、まず、動物に関わる経験からすごいと思った事柄を児童に紹介し、同じような経験はないか等について、話し合わせる。そして、動物について、児童の興味・関心を引き付けた後、指導者が作成した「どうぶつひみつブック」の一部を提示し、みんなも、自分の興味をもった動物で作ろうと提案していく。このようにして、学習に対する興味・関心を高めるとともに、どのような言語活動をするのかをイメージできるようにする。また、Ⅲ次の言語活動に向けて、いろいろな動物の生態について書かれた本や図鑑を用意し、並行読書できるようにしておく。さらに、題名読みから、「大工事」といえるわけを見つけながら読んでいくという、読みのめあてをつかめるようにし、学習計画を立てていく。その後、各自一人読みをし、「大工事」といえるわけが分かるところに線を引かせる。これにより、児童がどこで「大工事」と考えるか、その傾向を予めつかめるようにする。

Ⅱ次では、「ビーバーの大工事」のまとめり毎に、見つけた「大工事」といえるわけを基に「どうぶつ（ビーバー）じまん」を書き上げることにする。一つ目のまとめり〈木を切りたおすビーバー〉では、比喩表現や擬音などを用いて説明しているところがある。ビーバーの身体的特徴や木を切り倒す様子を伝えるための筆者の工夫である。それらについても手がかりにし、さらに、実物を提示したり、教材文とそこに掲載されている写真や絵を関連付けて読ませたりすることで、木を切るビーバーの様子をつかめるようにしていく。本時のまとめり〈ダムを作るビーバー〉では、材料（木、小えだ、石、どろ）や「さしこむ」「つみ上げる」「おもしろをする」「かためる」という言葉に着目させ、ダム作りで何をどうするのか、順序に気を付けて読んでいくようにする。最後の、〈巣を作るビーバー〉では、大工事が何のために行われたのか、その理由を考えさせる。そうすることで、敵から身を守るためのビーバーの知恵に気付かせるようにしたい。

最後に、まとめり毎に書いた、「どうぶつ（ビーバー）じまん」を基に、Yチャートを使い、班で集めて整理する。そして、ビーバーのすごいところを班で話し合わせ、ひみつブックに書き足し、ビーバーの「どうぶつひみつブック」を仕上げるようにする。

Ⅲ次で児童は、並行読書してきた中から興味をもった動物の本を選び「どうぶつひみつブック」をつくる。まず、同じ動物を選んだ児童同士で班になり、協力して「どうぶつひみつブック」を作らせる。この活動では、まず、班で一読し、気候に合った体のしくみや生きる知恵など、まとめるテーマを決める。そして、選んだ動物について友だちに伝えたいところを選び、「どうぶつじまん」に書く。YチャートまたはXチャートを使って、各自が書いた「どうぶつじまん」を整理し、分担してまとめていく。このYチャートやXチャートを使うことで、どのような共通点で情報を類別したのかが分かりやすくなるものと考えられる。最後に、その動物になって班で自慢を書き、まとめる。

出来上がった各動物の「どうぶつひみつブック」は、読み合うことができるように教室内に並べ、見て回るといったギャラリーウォークを行う。ギャラリーウォークでは、作品を読み合い、互いのよいところを付箋に書かせる。そして、見つけたいところを交流し合い、学習を振り返られるようにする。最後に、各班で書いたページを貼り合わせ、クラスで1冊の「どうぶつひみつブック」を仕上げることにする。

5. 学習指導計画（全 10 時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
I 次	1	○ 動物について話し合い「どうぶつひみつブック」を作るという学習の見通しをもつ。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導者が作成した「どうぶつひみつブック」を見せ、興味がもてるようにする。 ・ III次での活動をふまえ、並行読書できるように参考図書を用意する。
	2	○ 大工事の理由だと考えられるところに線を引きながら教材文を通読する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 題名にある「大工事」と「工事」の違いを考えさせる。 ・ 線を引いたところは、指導者が集約し、初読での児童の気づきをつかんでおく。 ・ 見出しを基にまとまりに分け、まとまり毎に何をする工事かを確かめさせる。
II 次	3	○ 〈木を切りたおすビーバー〉①~⑤段落を読んで大工事といえる理由を見つけ、「どうぶつ（ビーバー）じまん」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 50センチメートル以上の幹の絵や、「のみ」の実物を用意する。 ・ 書き出しを例示する。
	4	○ 〈木を切りたおすビーバー〉⑥~⑨段落を読んで大工事といえる理由を見つけ、「どうぶつ（ビーバー）じまん」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ オールや水かきの写真を示す。 ・ 多くの木を切り倒していることに気付けるよう、「つぎつぎ」「あちらこちら」などに着目させる。
	5 本 時	○ 〈ダムを作るビーバー〉を読んで大工事といえる理由を見つけ「どうぶつ（ビーバー）じまん」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ ダムを作る手順を材料と順序を表す言葉に着目して考えられるようにする。 ・ ビーバーになったつもりで書くよう助言する。
	6	○ 〈すを作るビーバー〉を読んで大工事といえる理由を見つけ「どうぶつ（ビーバー）じまん」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 何のために「大工事」を行ったのか考えさせる。
	7	○ 「ビーバーじまん」を基に、ビーバーの「どうぶつひみつブック」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 必要に応じて絵を書き入れてよいことを伝える。 ・ 班で内容毎に分担して書くようにする。
III 次	8	○ 選んだ動物でテーマを決め、「どうぶつじまん」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 予め、同じ動物を選んだ児童で班を組んでおく。
	9	○ 「どうぶつじまん」を基に「どうぶつひみつブック」を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「どうぶつじまん」を内容ごとにまとめて整理し、分担するよう指示する。
	10	○ 「どうぶつひみつブック」を読み合い、友だちのよいところを見つける。	<ul style="list-style-type: none"> ・ ギャラリーウォークをして、よいところを付箋に書いて交流し合うよう助言する。

6. 本時の学習

① 本時の目標

- ・順序に気を付けて、ダムを作るビーバーの様子を読み取ることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 本時の課題を確認する。	▼ 本時の課題を板書し、全員で読んで確かめる。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 〈ダムを作るビーバー〉を読み、大工事といえるわけを見つけよう。 </div>	
2. 本時の学習場面を音読する。	○ 大工事といえるわけを考えながら読みましょう。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 一斉読み 	
3. ダム作りの様子を読み取り、「どうぶつひみつブック」に書く材料を考える。	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 一人読みをする。 	○ 大工事といえるわけが、わかるところに線を引きましょう。
<ul style="list-style-type: none"> ・ ペアで交流する。 	○ どこに線を引いたか話し合しましょう。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体で交流する。 	◎ なぜそこに引いたのか、理由もつけたすとよいですね。
<ul style="list-style-type: none"> ・ 「どうぶつ（ビーバー）じまん」を書く。 	★ ビーバーの工事が、大工事といえるわけがつけられましたか。見つけたところを発表しましょう。
	▼ 材料の絵を用意し、ダム作りの手順を文と絵で確認できるようにする。
	▼ 高さ2メートル、長さ450メートルものダムを実感できるよう、長さが、豊里大橋より長いことを知らせる。
	○ 本時を振り返り、「どうぶつ（ビーバー）じまん」を書きましょう。
	◎ 「私は、私たちは、～」など、ビーバーになって書くようにしましょう。
4. 本時の学習を振り返り、次時の学習の見通しをもつ。	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 指名読みをする。 ・ 振り返りを書く。 	◎ 今日の学習を振り返って、読みましょう。
	○ 今日の学習を振り返りましょう。
	{評価}
	・ 読みとったことを基に「どうぶつ（ビーバー）じまん」を書くことができたか。



7. 指導を終えて

(1) 学年の取り組み

日常的な取り組みとして、4月当初より、話すこと・聞くことの約束や話型を常掲し、児童に意識づけるようにした。そして、1時間の課題を明確にしたり、考えをもつための時間を保証したりするなどして、各自が考えをもてるよう支援してきた。その上で、自分の考えと比べながら友だちの意見を聞くようにうながした。そうすることで、「～さんと同じで」「～さんと違って」「～さんに付け足して」など児童相互の考えを活発に交流しあうための基礎的な発言の仕方が定着してきた。このとき、理由や根拠を述べることも促してきた。これにより、理由や根拠を明らかにして発言できる児童も増えてきている。さらに、2～4人といった少人数での話し合いを積極的に学習の中に取り入れてきた。多くの友だちの前では発言しにくい児童も、自分の考えを発言しやすくなった。自分の考えを声に出してみることで、考えをまとめやすくなってきている。

また、読むことの領域では、基本的な知識を1学期から計画的に指導してきた。例えば説明的な文章を読む単元では、キーワードの見つけ方や、「はじめ」「中」「おわり」の3部で構成されていることなどについて学習してきた。これらの知識は、今後、説明的な文章を読んでいくときに生かされていくものと考えられる。

本実践に関わっては、児童の理解を助けるための指導材を作成した。これらは、適宜、提示することにより、情報の読み取りを助ける手立てとなった。さらに、児童の実態を考慮し、Ⅲ次で使う図書の選定を行った。このとき、学校の蔵書だけでなく、東淀川図書館とも連携し、団体貸し出しを利用した。これらの本は、本実践中、随時、並行読書できるよう各学級に常置した。そうすることによって、これまで動物の本に興味をもたなかった児童も、様々な動物の本を手に取り、読んでいる姿が見られるようになった。

(2) 本実践の考察

○ 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

本単元の言語活動を「どうぶつひみつブック」の作成とした。本学習の導入では、指導者が作成した「どうぶつひみつブック」を例示し、「世界で一つだけの本をみんなで作ろう。」と声があがり、呼びかけた。児童からは、「すごい。ほかの動物でも作ってみたい。」「本をみんなで作れるなんてすごい。」と声上がり、学習への意欲を持たせることができた。休み時間になると、並行読書できるように用意した動物の本をさっそく読む姿が多く見られた。

本学習では、「大工事」と「工事」の違いを考えさせ、「大工事」とはどのようなものか

を共通理解した。児童からは「(工事の規模が) 大きい」「場所が広い」「時間がかかる」などの意見が出た。これらの意見は、掲示することで「大工事」といえる理由を考える際の手がかりとなった。

Ⅱ次で学習したことを生かし、Ⅲ次では自分たちで興味をもった動物の本を選び、「どうぶつひみつブック」を作成した。Ⅱ次で学習したのと同じまとめ方をすることを学習の初めに伝えていたので、児童は文章の書き方にも抵抗なく取り組むことができた。

○ 基礎的基本的な知識・技能の習得

教材文の中には、意味の分かりにくい表現や言葉があった。そのため、写真や、木の絵や実物の「のみ」を用意した。児童からは「オールってこのことか」「のみみたいな歯ってすごいな」という声上がり、内容理解の助けとなった。写真や絵と本文を関連付けて読むことで、「どうぶつひみつブック」に書きまとめるときにも、文章だけでなく、それに関連する絵も描き加えて説明することができた。また、「川の絵」「ダムの方料の絵」を用意した。児童にダム作りの手順を操作させることで、川がせきとめられる様子を視覚的にとらえさせることができた。(資料①)



(資料① ビーバーのダム作りで使った指導材)

Ⅱ次では、「ビーバーの大工事」をまとめり毎に読み取り、「大工事」といえるわけを見つけていった。ペアで意見交流してから全体での交流をするようにした。そのことにより、自分の意見に自信をもち、いつもは発表することに躊躇する児童が進んで発言する様子が見られた。その際、本文を根拠にし、「大工事」といえる理由を明らかにしながら自分の意見を発表できる話型を用いるように指導した。(資料②)

Ⅱ次ではまとめとして、まとめり毎に「どうぶつ(ビーバー)じまん」を書いた。ビーバーになったつもりで書くことによって、書きやすくなった。また、「それに～」「だから～」などの書き方を例示することで、文章をつなげて書いた児童もいた。1枚のワークシートを使って書きためていくことで、前時の学習を活用して書き方を理解し、まとめていることができた。(資料③)

根拠

・わたしは、「ビーバーは、夕方から夜中まで、家族そう出でしごとをつづけます。」に線をひきました。どうしてかということ、家族そう出ということは、大ぜいできょう力しているから大工じだと思いました。

理由

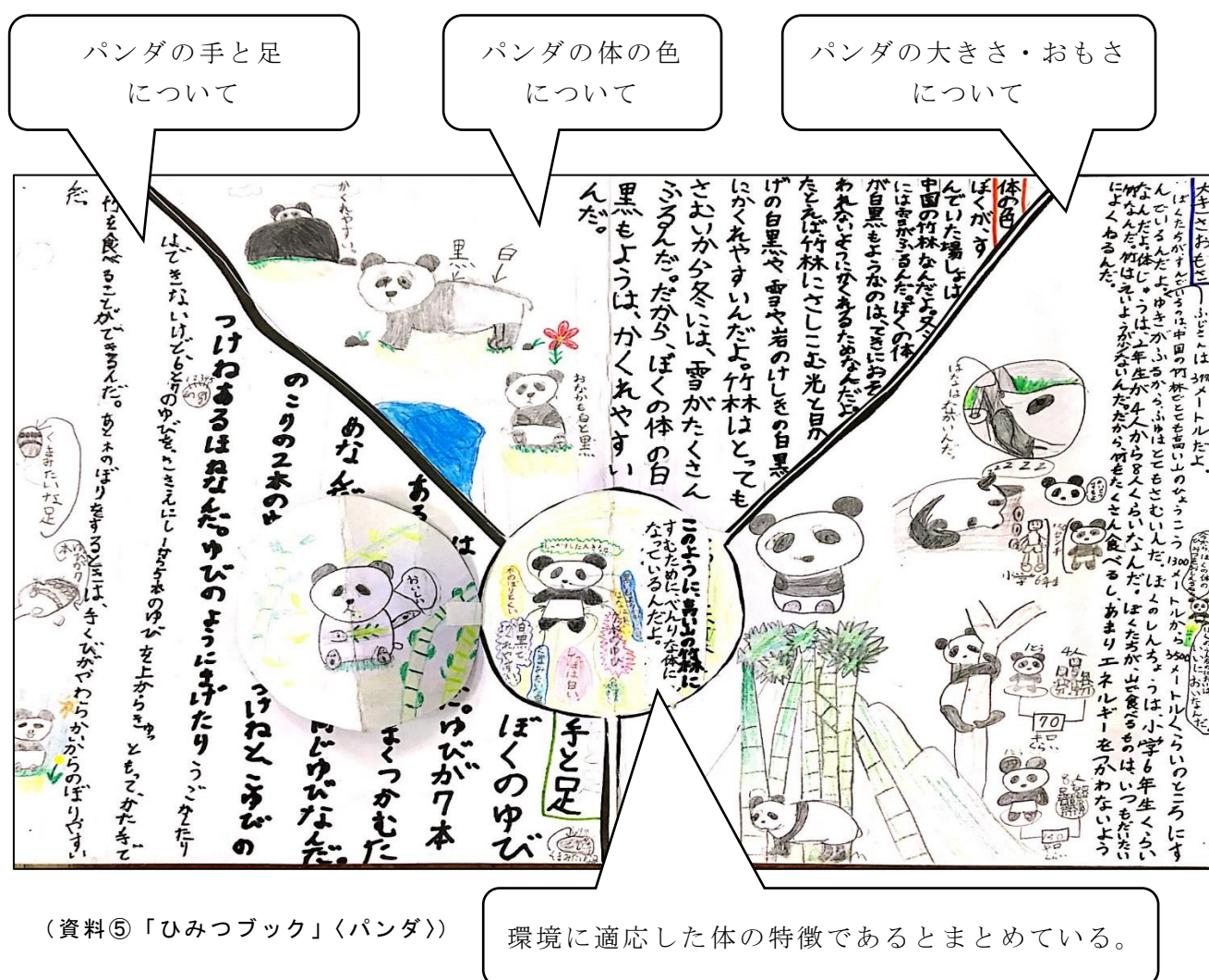
・～さんにつけ足して、「夕方から夜中まで」は長い時間がかかっているので、大工じだと思います。

(資料②「大工事」といえるわけの発言例)

ーバー〉〈ダムを作るビーバー〉〈すを作るビーバー〉でまとめた内容を班で話し合い、考えたことや気付いたことを「まとめ」として書いた。中には、自然にある材料を使い、時間をかけて大仕事を成しとげるビーバーの知恵や技能について思いをめぐらせていた。

(資料④)

Ⅲ次では並行読書してきた中から書きたい動物の本を選び、「どうぶつひみつブック」の作成に取り組んだ。まず班で一読し、まとめるテーマを決めた後、各自で本を読み取り、「どうぶつじまん」を書いていった。それからYチャートを用いて整理し、分担してまとめていった。例えばパンダの場合、大きなテーマは「パンダの体のひみつ」とし、各自見つけた体のひみつについて班でYチャートを使って「パンダの大きさ、おもさ」「パンダの体の色」「パンダの手と足」に分けた。Ⅱ次での学習を活用し、班で協力して「どうぶつひみつブック」を書き上げることができた。紙面には絵だけでなく、絵に関する説明を書き加える工夫も見られた。(資料⑤)



最後に、書き上げた「どうぶつひみつブック」を読み合い、交流した。どの児童も他の班の書いた「どうぶつひみつブック」に興味をもって読んでいた。児童からは「文章が短くまとまっていて読みやすい」「文章だけでなく絵でも説明があってわかりやすい。」「詳しく説明されていてよくわかった。」などの感想があり、書き手の工夫したところに注目して読むことができていた。

○ 図書の計画的な活用

Ⅲ次での言語活動のため、東淀川図書館から団体貸し出しで借り受けた図書を教室に置き、児童がいつでも読めるようにした。借り受けた図書を紹介すると、すぐに本を読み比べて好みの図書を探す児童の姿が見られた。普段はあまり読書をしない児童や、動物の本に興味をもっていなかった児童が、ビーバーやほかの動物に関心をもち、借り受けた図書だけでなく、学級文庫にある動物に関する本や図鑑を読んでいた。

また、Ⅲ次での「どうぶつひみつブック」の作成の段階になると、並行読書のために用意した本以外にも、学級文庫の本や図鑑を読んで調べたり、図書の時間に、必要な図書を探して借りたりする班もあった。積極的に本や図鑑を読んで、「どうぶつひみつブック」の作成に取り組む姿が見られた。

8. 成果と課題

- 根拠と理由を明らかにしながら自分の考えをまとめることができた。
- 発言の仕方が定着し、児童の発表や交流が活発に行われた。
- 指導材の工夫により、児童の興味・関心を高められ、理解を助けることができた。
- ▲ Ⅲ次で使う図書の選定にあたっては、より児童の実態に合ったものにする必要がある。

並行読書で用いた図書

・タヌキについてのまじめなはなし『たんと・タヌキ』	あかね書房
・カバについてのまじめなはなし『まるごと・カバ』	あかね書房
・カラー版 自然と科学『森のシマリス』	岩崎書店
・『へびのひみつ』	ポプラ社
・うみのにんじゃ『たこ』	福音館書店
・科学のアルバム『野生ゾウの世界』	あかね書房
・自然の観察事典『ニホンザル観察事典』	偕成社
・動物大せっきん『オオカミ』	ほるぷ出版
・動物大せっきん『ヒョウ』	ほるぷ出版
・深海生物大集合『超長一いカグラザメとおかしなサメのなかまたち』	すずき出版
・飼育員さんおしえて『ライオンのひみつ』	新日本出版社
・飼育員さんおしえて『キリンのひみつ』	新日本出版社
・飼育員さんおしえて『ラッコのひみつ』	新日本出版社
・飼育員さんおしえて『ゾウのひみつ』	新日本出版社
・飼育員さんおしえて『イルカのひみつ』	新日本出版社
・飼育員さんおしえて『パンダのひみつ』	新日本出版社

第3学年の実践

国語科学習指導案

指導者 細見 典芳

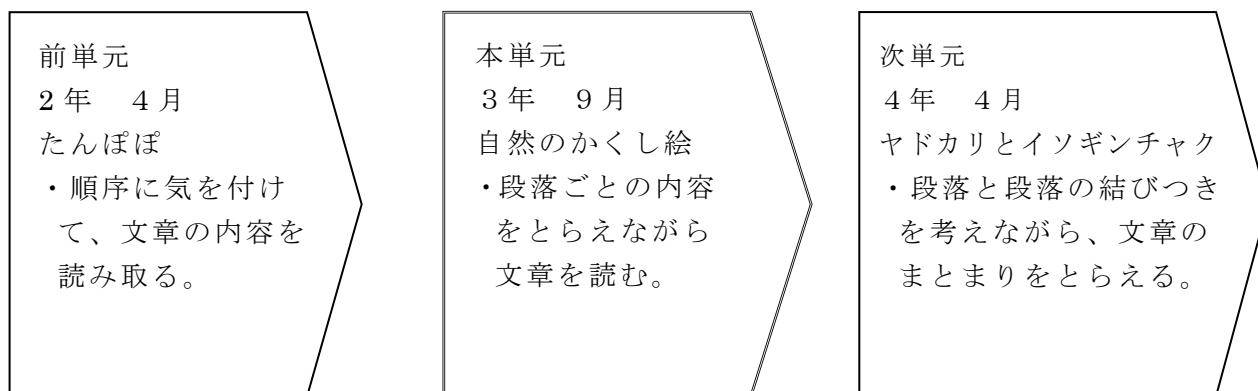
日 時 平成28年9月21日(木)第5校時(13:45～14:30)

学年・組 第3学年2組(在籍35名)

単 元 「自然のかくし絵事典」を作ろう。

(「自然のかくし絵」 矢島 稔 文 東京書籍 3年上)

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- 生き物の生態が書かれている本や文章に興味をもって読み、内容から読み取ったことを短くまとめて書こうとする。
- ・ 中心となる語や文をとらえて書かれている内容を正しく読み取ることができる。
- ・ 読み取ったことを基に「かくし絵カード」にまとめることができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
・生き物の生態が書かれている本や文章について興味をもち、進んで読もうとしている。	・こん虫の身のかくし方について、内容の中心となる語や文に注目して読んでいる。	・構成や記述の仕方を工夫して、身のかくす生き物について「かくし絵カード」にまとめる。	・事項や接続語が文と文との意味のつながりに果たす役割を理解し使うこと。

4. 指導にあたって

【児童観】

本学級の児童は読書が好きで、朝の読書タイムや図書の時間には集中して本を読んでいる。また、友だち同士でおもしろかった本を紹介し合い、図書室から借りた本を交換して読む姿もよく見られる。多くの児童は物語の本や絵本を選んでおり、歴史の本も人気があるが、自然科学の本を選ぶ児童は少ないようである。一方で、理科の学習では意欲的にこん虫採集や飼育をしている。実際に見たり聞いたりできる場合には科学的な話題に大いに

興味はあるのに、図書資料に興味をもちにくいのは、児童が知りたい情報を資料からうまく見つけ出せないからであると考え。

前学年で児童は、説明的な文章において、時間や事柄の順序に沿って文章の内容の大体をとらえることを学習している。また6月に学習した説明的な文章「道具を使う動物たち」では、形式段落という小さなまとまりがあるということを知り、形式段落ごとに書かれている内容を短くまとめる学習をした。段落ごとの内容の大体を発表することはできていたが、いざノートに自分の言葉で書くとなると、文章が長くなったり、本文を丸写ししたりする児童が多かった。

本単元の学習を通じて、内容の中心となる文や言葉をとらえて簡潔にまとめる力を身に付けさせ、読書の幅を広げさせたい。

【単元観】

児童の実態を受け、本単元では付けたい力を、学習指導要領におけるC読む(1)イ「目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと。」とする。

この力を付けるために本単元では、生き物の生態が書かれている本から読み取ったことを「かくし絵カード」にまとめるという言語活動を設定する。

本教材「自然のかくし絵」は、児童の生活において身近なこん虫を扱っていることから、親しみをもって読むことのできる教材である。文章は10個の形式段落から成り立っており、それぞれの段落が1～3文で構成されている。文章に即した写真も多く、児童にとって内容もとらえやすくなっている。こん虫のほご色の役割について具体的な例を挙げ、「こん虫が敵からどのように身をかかしているのか」ということを中心に説明しているため、大切な言葉や文章に着目しやすく、書かれていることを正確に読み取る力を育成するのに適している。

「自然のかくし絵」を読み、「かくし絵カード」を作るという活動を通して、段落ごとに中心となる文章や言葉に着目して書かれている内容を読み取り、短くまとめて書く力が身に付くと考え。

また、並行読書を行い興味関心も広がったところで、第Ⅲ次ではそれぞれが選んだ生き物の保護色や擬態についてまとめた「かくし絵カード」を書く。それをクラスで一冊の「かくし絵事典」にまとめ、児童間の交流を図る。

【指導観】

本単元では、「かくし絵事典」を作る活動を通して、児童が生き物の生態に興味をもって授業に取り組めるようにしたい。単元を通して、こん虫の住む森をイメージした壁面掲示をし、学習が進むにつれ、昆虫の模型を追加するなどして児童の興味を持続させたい。また、興味をもったらすぐに調べられるよう、図書館の集団貸し出しを利用して資料コーナーを作り、並行読書にも取り組む。

第Ⅰ次では、今までのこん虫採取などの経験を想起させることで、より教材文に親しみをもって読めるようにする。題名読みをする時は、かくし絵はどんなものかを確認しやすいように、かくし絵アートの例を児童に見せる。また、「自然のかくし絵」の元になった写真集からいくつかの写真を選んでスライドにし、かくれているこん虫を探すクイズをして、こん虫のほご色についての興味を引き出したい。さらに、担任が作成した「かくし絵カード」の見本を提示することで学習の見通しをもてるようにする。

第Ⅱ次では、ほご色という言葉の意味を確認し、色という言葉に着目して文章を読んで

いく。文中の、こん虫の体の特徴(色)や身をかくす場所を色分けして線を引かせ、視覚的に分かりやすくする。また、身のかくし方を自分の言葉で説明できるようにするため、こん虫の模型を持たせて、それを動かしながらペアで聞き合いをする。このペアトークを通じて言葉を整理し、要点をつかんでから、「かくし絵カード」に読み取ったことをまとめていく。その際は、「体の色」「かくれる場所」「かくれ方の名前」という3つの項目に関する内容を落とさずに書かせるようにしたい。レイアウトも工夫できるよう、カードにはこん虫の絵と名前だけ書いておく。

さらに、活発な交流を促すため、数人の児童には大きくした「かくし絵カード」にまとめさせ、黒板に掲示する。カード全体を見て比較することで、カードの書き方の工夫や友だちのよいところを全体で話し合いやすくしたい。友だちの「かくし絵カード」を見て交流した後は、自分の「かくし絵カード」を振り返り、足りない言葉を書き加えたり、いらない言葉を削除したりして推敲させる。「〇〇さんの△△がいいので真似したい」「……は忘れず書く」といったように、次の「かくし絵カード」を書くときに向けて自分のめあてをもたせるためである。また、こん虫のかくれ方に名前を付けさせることで、前時のこん虫のかくれ方との違いに着目させ、文章の構成にも目を向けたい。

第Ⅲ次では、擬態や保護色をもつ生き物について調べ、「かくし絵カード」を作る。その際には、Ⅱ次で学んだことをもとに、前述の3つの項目について落とさず書くこと、自分なりの工夫を加えてまとめることができるように支援する。単元の最後には、個人でつくった「かくし絵カード」をクラスで集め1冊の事典にし、互いに書いたものを読み合わせ、あらたな興味をひき出し、読書の幅を広げたい。

5. 学習指導計画 (全10時間)

次	時	学習活動	支援のあり方(発問・助言・補説 等)
Ⅰ次	1	<ul style="list-style-type: none"> ○ こん虫を採取したときの経験を想起させる。 ○ 「自然のかくし絵」の題名読みをする。 ○ 教材文を読み、「かくし絵事典」を作るという学習課題を知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 壁面掲示「こん虫の森」を示す。 ・ 題名から想起できることを交流する。 ・ かくし絵の意味を確認するためかくし絵アートを用意しておく。 ・ 「自然のかくし絵」の写真集から選んだ写真で、かくれている昆虫を探すクイズを出し、興味を引き出す。 ・ 担任が「かくし絵カード」の見本を用意し、関連図書のコーナーを紹介する。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文章の構成をつかむ。 ○ ほご色とは何かを読み取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 形式段落に番号をつけ、大体の構成をつかむ。 ・ 身をかくすのに役立つ色がほご色ということを知る。
Ⅱ次	3	<ul style="list-style-type: none"> ○ コノハチョウのほご色について書かれている段落を読み、カードにまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 各段落の中心となる文に着目させる。 ・ こん虫の体の色には赤線、身をかくす場所には青線を引き、まとめる時の手だてになるようにしておく。
	4	<ul style="list-style-type: none"> ○ トノサマバッタのほご色につ 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 模型を動かしながらペアトークをおこな

	本時	いて書かれている段落を読み、カードにまとめる。	い、身のかくし方を自分の言葉で説明させる。
	5	○ ゴマダラチョウのほご色について書かれている段落を読み、カードにまとめる。	・ 児童の書いた掲示用の「かくし絵カード」や学習のまとめは、壁面に掲示し、学習の足跡としてたどれるようにしておく。
	6	○ 3つのこん虫の違いを比べる。	・ 前時のほご色と違うところに目を向けさせる。
Ⅲ次	7	○ ほご色が役立つときと役立たないときについてまとめる。	・ かくれ方の名前を話し合わせる。
	8	○ 図鑑や本でほご色で身のかくす生き物について調べ、カードにまとめる。	・ 「じっとしているかぎり」「動いた時には」という言葉に注目させる。
	9	○ 「かくし絵カード」を読み合い、感想を交流する。	・ 調べたことを自分の言葉でまとめられるように助言する。
	10	○ 「かくし絵カード」を集めて「かくし絵事典」にする。	・ 「かくし絵カード」を読み合い、友達の書き方の工夫や、取り上げられた生き物のおもしろさに気付くようにする。

6. 本時の学習

① 本時の目標

- ・ トノサマバッタが自分の体の色に合わせた場所に住んでいることを読み取り、「かくし絵カード」にまとめることができる。

② 本時の展開

学習活動		★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 本時の課題を確認する。		▼ 前時に作成した「かくし絵カード」等を使って振り返る。
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> トノサマバッタはどのようにして身のかくしているかを読みとろう。 </div>		
2. 教材文を音読する。		・ トノサマバッタについて書かれているところを音読する。
3. 内容を読み取り、身のかくし方についてまとめる。		○ トノサマバッタのほご色についてどんなことが書かれているのか考えながら読みましょう。
4. 「かくし絵カード」に書く。		▼ 本文に書かれている内容を分類し色分けさせる。
		★ トノサマバッタはどのようにして敵から身のかくしているのでしょうか。
		○ 模型を使ってペアで説明し合いましょう。
		○ 読み取ったことを「かくし絵カード」に分かりやすくまとめましょう。

<p>5. 全体で交流する。</p> <p>6. 本時の学習を振り返る。</p>	<p>○ 友だちと自分のカードの書き方を比べ、良いところや違うところを発表しましょう。</p> <p>★ トノサマバッタのかくれ方はどのような名前になるのでしょうか。</p> <p>◎ 前時のコノハチョウとの違いを考えさせる。</p> <p>○ 今日学習したところを振り返りましょう。</p> <p>○ 振り返り欄にチェックをする。</p> <p>{評価} トノサマバッタのかくれ方を正しく読み取り、かくれ方の名前を考えることができたか。</p>
--	---



7. 指導を終えて

(1) 学年の取り組み

年度当初より、活発な意見交流のできる児童・クラスに育てるための取り組みとして、ハンドサインや話型を活用してきた。全校で統一された掲示物をもとに、国語に限らず1日の活動を通して指導した結果、ハンドサインはほぼ定着し、積極的に発言しにくい児童もハンドサインで意思表示できるようになった。話型を使って自分の意見を言える児童も確実に増えている。

また、ペアトークやグループトークも積極的に取り入れ、自分の考えに自信を持って話せる場を設けるようにした。(資料①)これにより、児童の学習内容の理解に対する不安を除くことができ、児童間の相互理解も促すことができた。そのため、全体交流の場でも積極的に発言できる児童が増えた。

さらに、確かな読みの力を付けるために音読に力を入れた。宿題で練習させるほか、授業や朝の学習の時間に一斉読みや指名読みなどの様々な方法で読ませたり、ペアで聞き合いをさせたりした。結果、自然なスピードで声を合わせてハキハキと音読できるようになってきた。テキストのどこに何が書いてあるかすぐに把握できる児童も増えてきた。



(資料① ペアトークの様子)

1学期の「道具を使う動物たち」では、段落の意味や、文章の「始め・中・終わり」を

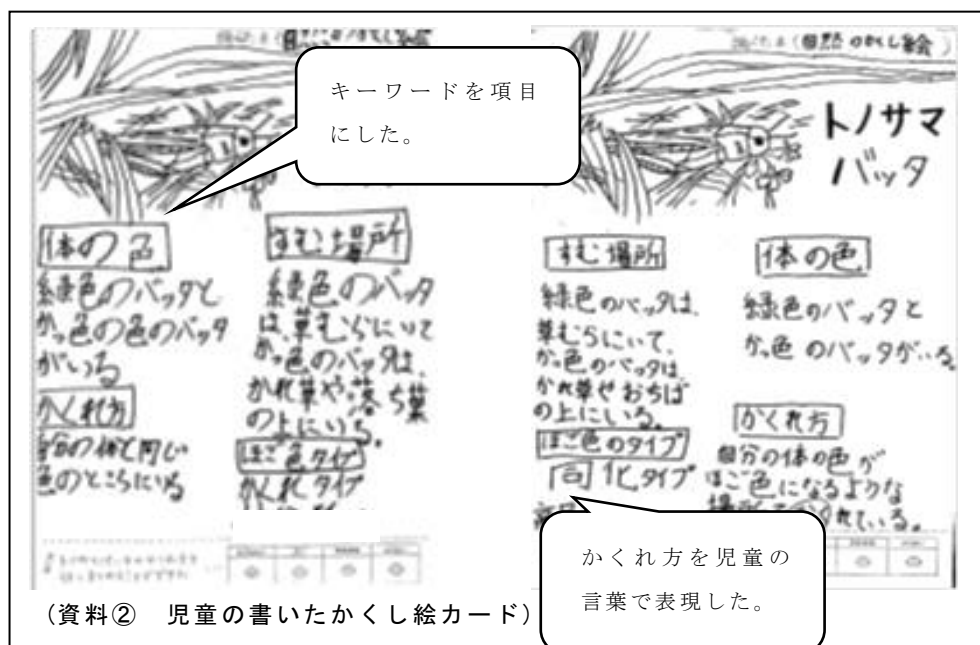
ふまえた簡単な文章構成の学習を行い、「ゆうすげ村の小さな旅館」では、場面ごとに内容の要約をする学習を行った。これらの学習を通じて児童は、文章のまとまりごとに中心となる文や言葉があると知り、見つけることができるようになった。

加えて、積極的に読書をする児童を育てるため、学年の廊下に書架をもうけ、定期的に図書室の本をまとめて借りて置いておき、どのクラスの児童も自由に手に取れるようにした。置いておく本は、その時々学習内容に関連する本だけでなく、人気のシリーズ本やロングセラーの物語なども選んだ。書架は読書タイムや、課題が早く終わったときなどによく利用され、最近では児童が置いて欲しい本を図書の時間に選ぶ姿も見られるようになった。

(2) 本実践の考察

○ 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

本実践では、普段こん虫の生態に興味がない児童も意欲的に学習に取り組めるよう、生き物のほご色や擬態についての「かくし絵事典」をクラスで作るという目標を設定し、「自然のかくし絵」の文章を使って「かくし絵事典」の1ページである「かくし絵カード」の書き方を学ぶという単元構成にした。一人一人が受け持つ「かくし絵カード」のレイアウトは、児童の間で流行しているキャラクターカードを参考に、こん虫のイラストを大きく配置し、項目名の配置にもこだわられるように余白の多いものにして、読



み取りが苦手な児童も積極的に取り組めるようにした。書く項目は、こん虫の名前のほか、「体の色」「かくれる場所」「かくれ方の名前」の3つを決め、要点を押さえやすくした。(資料②)また、こん虫の住む森をイメージした掲示物や授業で作成したカードをはり、毎時間の内容を視覚的にいつでも振り返ることができるようにした(資料③)ことで、友だちのいいところや反省を次に生かしやすかった。学習が進み、書き方のコツをつかむと、本文にない知識を付け足して書いたり、項目の配置や文字のデザインに凝ったりと、独自の工夫を凝らす児童も出てきた。仕上げるのにかかる時間も短くなっていき、文章の中から大事な言葉や文章など必要な情報を探し出す力も付いてきた。

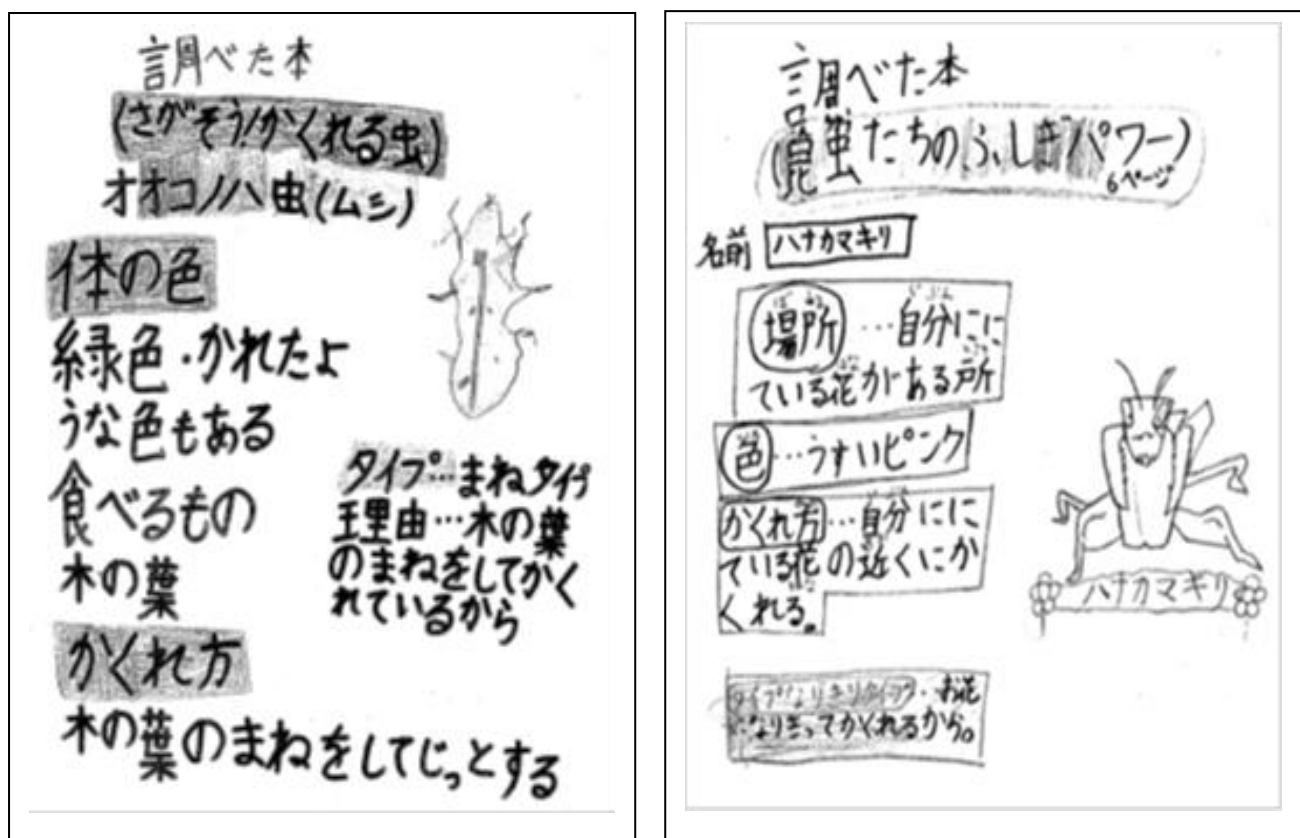


(資料③「こん虫の住む森」の前で模型をつかって説明する児童)

また、「自然のかくし絵」の元になった写真集²から選んだ、ほご色や擬態を上手に使うこん虫の写真を使ったクイズの時間をはじめに設けたことも、児童の興味関心を引きだすのに効果的だった。「自然のかくし絵」の写真集をきっかけに、図書館の集団貸し出しを利用して作った並行読書コーナーの本を手にする児童が徐々に増えていった。Ⅲ次で調べて書く段階に入る前に、「もう何の生き物のこと書くか決めたで。」と教えてくれる児童が多くいた。書き始めると、多くの児童が何枚も「かくし絵カード」を書いていた。(資料④)

クラスで1冊の「かくし絵事典」が完成すると、数人が集まってページをめくり自分の書いたページを見せ合う姿や、読書タイムに一人じっくり読む姿が見られた。こん虫でなく、海の生き物を取り上げた児童もあり、児童の興味関心を広げる効果があったと考える。

学習後は、本を使った調べ学習に興味をもち、国語に限らず他の教科で取り上げられた内容に関する本を、図書の時間などに借りたり読んだりするなど、積極的に調べ学習をする児童が増え、読書の幅が広がったようである。



(資料④ 児童がⅢ次で作成した「かくし絵カード」)

○ 基礎的基本的な知識技能の習得

本文を読み取る際は、その時間に学習する段落の文章を、「体の色」「かくれる場所」「かくれ方」の項目ごとに色分けした。児童は文章をよく読み、こん虫の何のことについて書いてあるのかを分類でき、見た目に分かりやすくすることができた。これは、「かくし絵カード」にまとめる時のよい手がかりになった。

本文から読み取った「こん虫のかくれ方」を「かくし絵カード」に書く前に、昆虫の模型を動かしながら隣同士で説明の聞き合いをした。先にペアトークをして言葉を整理することで、自信をもって「かくし絵カード」に書き込むことができた。

全体交流の時は、「こん虫の住む森」を掲示した前で模型を動かしてかくれ方を説明さ

² 矢島稔『自然のかくし絵』偕成社 1983.6

せたり、拡大したワークシートに書き込んだものを掲示したりし、書きぶりを見ながら意見を言えるようにした。話型やハンドサインを用いて、活発に交流することができた。その時に出た意見を、次時の「かくし絵カード」にうまく反映させた児童も多かった。

「かくし絵カード」の下の部分に、顔の表情でできたかどうか自己評価をする欄を作り、毎回振り返らせた。これにより、個々の児童に課題が明確になり、学習が進むにつれ、要点を押さえ工夫された「かくし絵カード」を書けるようになっていった。

○ 図書の計画的な活用

読み聞かせの取り組みである「絵本ばたけ」や読書タイムを通し、本に触れる機会を多く作るようにした。読書を促すために、学年の廊下に書架をもうけ、その時々学習に関連した本や児童が読みたい本を図書室からまとめて借りてきておき、読書タイムなどに自由に読めるようにした。結果、児童は休み時間や、課題が早く終わった時などの隙間の時間にも積極的に本を手に取り読むようになった。また、自ら書架に置く本を選ぶ児童も出てきた。

本単元の学習を進めている時期には、図書館の集団貸し出しを利用し、並行読書本コーナーを作った。学習が進むにつれ、自分が書きたい生き物を探したり、興味を持った生き物についていくつもの資料を引いて調べたりする児童が増えた。

学習後は、物語の本に偏らず、その時々で学習した内容に関連する本や興味のある話題を取り上げた自然科学系の本を、図書室などで借りて読む児童の姿が多く見られるようになった。

8. 成果と課題

- クラスでかくし絵事典を作ろうという目標をもって学習を進めることで、児童は積極的に関連の本を手に取り、調べることができた。
- 写真や模型、こん虫の住む森の掲示などを活用することで、学習への意欲や興味を持続させることができた。
- ペア交流や全体交流のしかたを工夫することで、交流が活発になり、児童は友だちの意見を取り入れながら読み取った内容をまとめられるようになった。
- ▲ 全体交流の場では、ICT機器を使うなどして掲示物をより見やすくする工夫があればよかった。

並行読書に用いた図書

自然のかくし絵－昆虫のほご色と擬態
むしたちのさくせん
昆虫たちのふしぎパワー
植物になりたかった虫
昆虫たちの擬態
森の小さなアーティスト
むしのかくれんぼ
昆虫のふしぎ
昆虫かくれんぼクイズ
ぎたい生物図鑑
どこにいるかな
さがそう！かくれる虫
だましあう生き物の話

偕成社
福音館書店
世界文化社
国土社
誠文堂新光社
福音館書店
福音館書店
偕成社
ひさかたチャイルド
笠倉出版社
アリス館
偕成社
学研教育出版社

第4学年の実践

国語科学習指導案

指導者 井田 雄太

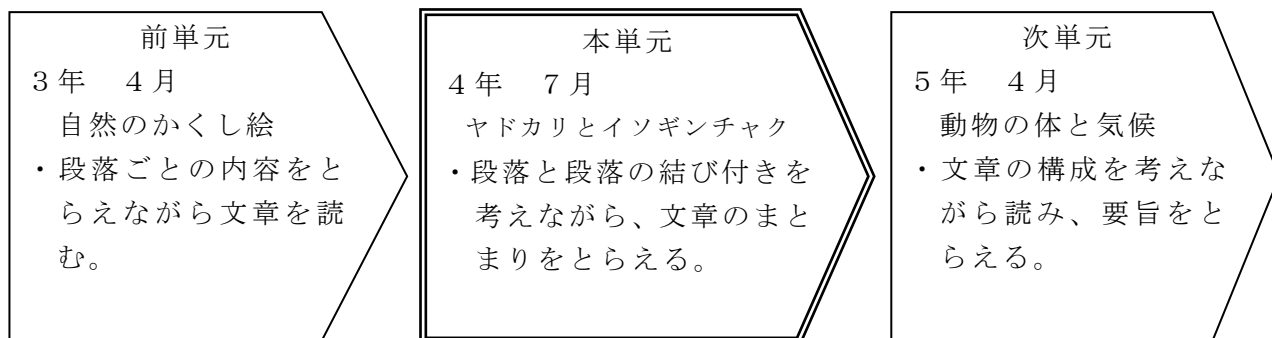
日 時 平成28年7月6日（水）第5校時（13：45～14：30）

学年・組 第4学年2組（在籍33名）

単 元 「生き物の不思議な関係ブック」をつくろう。

（「ヤドカリとイソギンチャク」武田正倫 東京書籍 4年上）

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- 筆者の書き方の工夫に興味をもち、調べたことが伝わるよう文章にまとめようとしている。
 - ・ 段落どうしの結び付きを考えて読み、文章のまとまりをとらえることができる。
 - ・ 共生関係にある生き物について調べ、文章にまとめることができる。
 - ・ 筆者の表現の工夫を見つけながら読むことができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
・ヤドカリとイソギンチャクの関係に興味を持ち、何がどのように説明されているのかを読み取ろうとしている。	・ヤドカリとイソギンチャクの関係をとらえるために、段落相互の関係を考え説明のまとまりを見つけてながら読んでいる。	・ヤドカリとイソギンチャクの関係について、教材文から考えた見出しを根拠にして、自分の考えを書いている。	・「問い」と「答え」を表す語句や、話題を変える語句に着目しながらまとまりをとらえている。 ・調べたことが伝わるように、段落相互の関係などに注意して文章を構成している。

4. 指導にあたって

【児童観】

本学級の児童は読書が好きで、読書タイムや図書の時間、絵本の読み聞かせなど、真剣に取り組む姿勢がよく見られる。前学年までの積み重ねもあり、音読もすらすらと上手にできる児童がほとんどである。

5月教材、物語文「走れ」では、中心となる人物の気持ちの変化とその理由を考えて読み、交流をした。ほとんどの児童が登場人物の行動や会話から気持ちを考え、書くことができた。また、中心人物の、のぶよの気持ちがどこで変化したのかを考えた際には、ほとんどの児童が変化した箇所を理解することができていた。しかし、なぜそこでのぶよの気持ちに変化したのかを問うと、自分の考えを根拠をもとに、上手く表現できる児童は少なかった。

説明的な文章では、前学年までに形式段落ごとに中心となる言葉や文に気を付けながら読み、内容を正確に読み取る学習は経験している。しかし、その段落どうしがどのようなつながりで文章を構成しているかについては、十分に理解していない。

本単元では、文章の内容面でのまとまり（意味段落）を理解させ、段落相互の関係を読み取る力を付けさせたい。また、自分の考えを上手く表現できるよう、実感的に内容を理解し、読みを深めていけるようにしたい。

【単元観】

本単元では、付けたい言語の力を「C 読むこと」の指導事項イ「目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと」とする。この力を付けるために、「共生関係にある生き物について書かれた本を読み、文章にまとめて紹介する」という言語活動を位置づける。

本教材は、「問い」と「答え」の関係が3回出てくるので、まとまり（意味段落）を見つけやすい構成になっている。また、「まず」「次に」「実は」「では」などの言葉に着目させることで、段落どうしのつながりをとらえやすい構造となっている。特に「では」によって、「問い」と「答え」がどのようにつながっているのかが考えやすくなっているので、意味段落どうしが筆者の考えにつながるように結び付いていることにも、目を向けさせやすい文章である。

教材文の読み取りで学習した文章構成や筆者の表現の工夫を活用し、読み手にとって分かりやすい文章を書くという活動を設定する。それを通して、読む力を確かなものにするだけでなく、書く力も養うことが期待できると考える。

【指導観】

第Ⅰ次では、教材文を意味段落に分ける。既習の「始め」「中」「終わり」の構成を想起させ、それに加え、「中」が三つに分けられることを伝える。その際、話題を変える語句に注目しながら考えるようにする。

第Ⅱ次では、筆者の三つの「問い」の段落とそれに対する「答え」の段落に着目して、意味段落の構成をとらえながら読んでいく。筆者の投げかける三つの「問い」とそれに対する「答え」を押さえることによって、段落相互の結び付きを考えながら、本文に書かれているヤドカリとイソギンチャクの間を移動できることを理解できるようにする。ヤドカリがイソギンチャクを移す方法を読む際には、挿絵と対比させながら読み取ることで、文章だけではなく挿絵を含めて筆者が説明していることも押さえておきたい。三つの意味段落それぞれの内容を読みとっていく際には、意味段落ごとに見出しを付けることで要点を確かめられるよ

うにする。

本時では、筆者の表現の工夫を見つけ、交流を行う。学習課題を提示する際には、本論の三つのまとまりで、「どれが1番わかりやすかったか」と問い、筆者の表現の工夫を見つけるきっかけとしたい。次に自分の選んだまとまりについてどのような工夫がされているのか考えるようにする。その際、選ばなかったまとまりと比べるように助言する。その後、意見の交流が活発に行えるよう、グループでの交流を取り入れる。このように、自分の考えを発表するだけでなく、友だちの意見を聞き、感想を伝え合ったり、質問をしたりすることで、さらに読みを深め、自分の考えに自信がもてるようにしたい。まとめでは、筆者が説明することに合わせて表現を工夫していることに気付かせ、第Ⅲ次の言語活動につなげたい。

第Ⅲ次では、海の生き物について調べたことを文章にまとめて交流する。教材文の読み取りで学習した文章構成や筆者の表現の工夫を活用し、読み手にとって分かりやすくまとめるようにする。まとめるときには、どの技が説明に必要なかを考えさせたい。また、交流する際には、友だちがどんな工夫をしているかを考えながら紹介を聞き、感想を伝えるようにしたい。

5. 学習指導計画（全9時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
I 次	1	○ 教材文を通読し、第一次感想を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本単元の最後には、共生関係にある生き物について調べたことを文章にまとめることを伝える。 ・ 教材文を読んで、初めて知ったこと、もっと知りたいこと、疑問に思ったことなど、第一次感想を書くようにする。
		○ 第一次感想を交流する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友だちの多様な意見を聞くことで学習の見通しや興味を持てるようにする。
	2	○ 教材文を意味段落に分ける。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 既習の「始め」「中」「終わり」の構成を思い出すようにする。 ・ 「中」が三つに分けられることを伝え、話題を変える語句に注目して段落構成を考えられるようにする。
II 次	3	○ ヤドカリがイソギンチャクを付ける理由を読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「なぜ」に着目し、「問い」の文であることを押さえる。 ・ 論が、「まず」「次に」のような順序を表す言葉によって展開されていることに気付かせる。 ・ 「実は」に着目し、「答え」の段落になっていることに気付かせる。
	4	○ ヤドカリがイソギンチャクを移す方法を読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 話題を変えるときに使う「では」という語を確かめるようにする。 ・ 「どうやって」に着目し、「問い」であることに気付かせる。

	5	○ ヤドカリについて イソギンチャクの利 益を読み取る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 誰が、何を、どうやって調べたことなのかを確かめるようにする。 ・ 「問い」に対する「答え」が、9段落の内容であることを確かめるようにする。 ・ 理解が難しい児童には、教科書の挿絵の番号を手がかりに、それに対応する本文にも番号をつけ、順序に気付くようにする。
	6 本 時	○ 筆者の表現の工夫 を見つける。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「では」に着目し、新たな「問い」が書かれていることを確かめる。 ・ 主語がイソギンチャクに変わっていることに気付くようにする。 ・ ヤドカリに付いている場合とついていない場合の餌の取り方を比べさせ、その違いが理解できるようにする。 ・ 「しかし」に着目させ、前後の文を対比して読むようにする。 ・ 「問い」に対する「答え」が、11段落の内容であることを確かめるようにする。
Ⅲ	7 8	○ 共生関係にある生 き物について書かれ ている本を読み、文章 を書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 共生関係にある生き物について調べたことを問いと答え、説明の形式でまとめるよう促す。 ・ 読み手に分かりやすくするために、今までに学習した表現の工夫を活用するよう助言する。
次	9	○ まとめた文章を紹介し、意見を交流する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 友だちがまとめた文章にどのような工夫が使われているか考えながら読むよう促す。

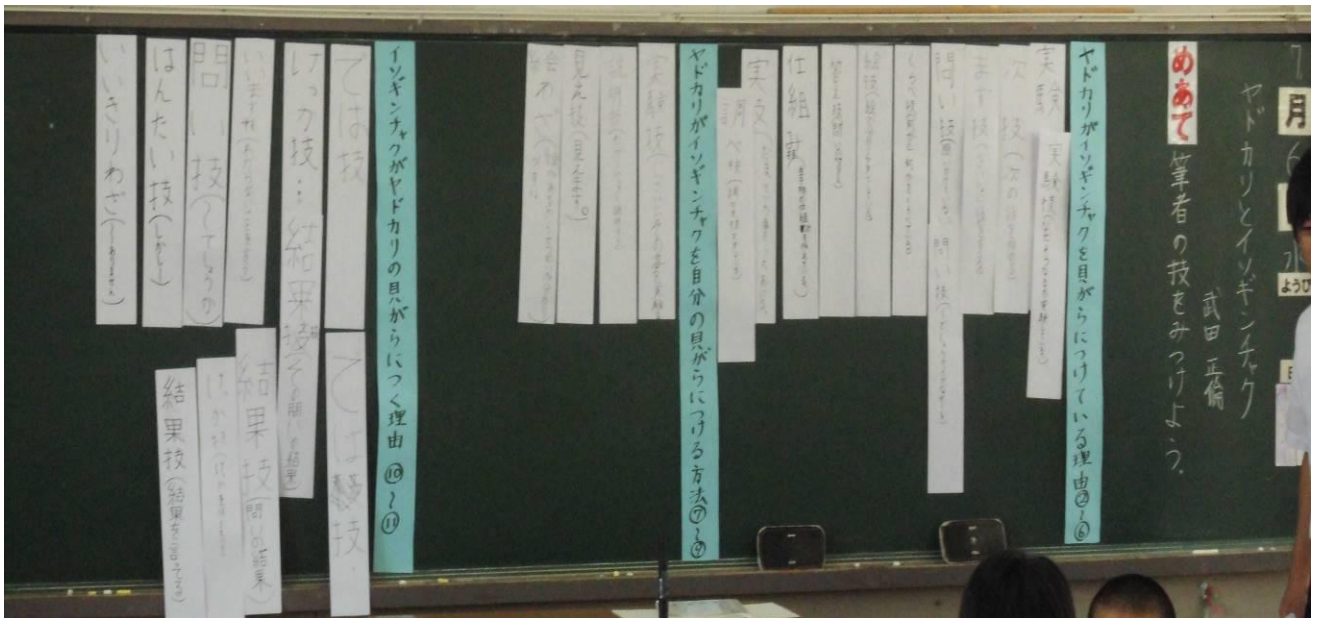
6. 本時の学習

① 本時の目標

- ・筆者の表現の工夫を見つけることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 本時の課題を確認する。	<p>★ 中の三つのまとまりの中でどのまとまりが1番わかりやすかったですか。</p> <p>▼ わかりやすいまとまりには筆者の表現の工夫が隠されていることに気付かせるようにする。</p> <p>▼ 本時の課題を板書し、全員で読んで確かめる。</p>
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px auto; width: fit-content;">筆者の技を見つけよう。</div>	
2. 教材文を読む。	<p>○ 筆者の技を探しながら読むようにしましょう。</p>
3. 筆者の表現の工夫を見つけ、交流する。 <ul style="list-style-type: none"> ・グループで ・全体で 	<p>★ これまでの説明的な文章で、筆者の技はどんなものがありましたか。</p> <p>▼ 掲示してある「筆者の技カード」を示しこれまで見つけた「技」を思い出させるようにする。</p> <p>▼ 段落相互の同じところと違うところを見つけたことを思い出させるようにする。</p> <p>○ これまでの筆者の表現の工夫を思い出して筆者の表現の工夫を考えてみましょう。</p> <p>▼ それぞれのまとまりを比較して考えるようにする。</p> <p>▼ 友だちの意見と自分の意見を比較しながら聞くようにする。</p>
4. 本時の学習を振り返り、次時の学習の見通しをもつ。	<p>○ 今日の学習で学んだこと、筆者の技を見つけることができたかななどをまとめましょう。</p> <p>○ 今日学んだ筆者の表現の工夫を使って次回から生き物の関係を文章にまとめていきます。</p> <p>{評価}</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 筆者の表現の工夫を見つけることができたか。



7. 指導を終えて

(1) 学年の取り組み

本学年では、「自分の考えを話す」「語彙を増やす」「多種多様な本を読む」ことができるように4月当初から国語の学習に取り組んできた。

一つ目は、個々が自分の考えを発表できるよう、ペアトークやグループトークを毎時間設定した。少人数で行うことで、互いの意見に共感したり質問をしたりしやすく、全体交流までに考えを整理できるため、自信をもって発表できる児童が増えた。また、友だちの良い意見を推薦することもあり、より多くの児童が発表できるようになってきた。

二つ目は、語彙を増やす活動としては辞書引きを中心に行った。手に届く場所に国語辞典を置き、分からない言葉が出てきた時には辞書で意味を確認するようにした。辞書の早引きや言葉集めなど楽しんで活動できるものを繰り返し行うことで、語彙を増やすだけでなく、文章に出てくる言葉一つ一つをしっかりと見るようになった。

三つ目は、多種多様な本が読めるよう、並行読書にも取り組んできた。朝の読書タイムでは、月に一度、地域・保護者の方による読み聞かせがある。その中で、季節感のある本や学習内容に関連した本の読み聞かせもあり、児童が本を好きになる良い機会となっている。読み聞かせが終わった後には、さらに読みが広げられるよう、同じ作者の本や内容が似ている本を教室でも紹介している。

本単元に入る前に、既習の教材を使って説明的な文章の構成や筆者の工夫について学んだ。児童は、内容が理解できているので、構成に着目して正しくとらえることができた。また、内容が似ている他の教材と比較し、どちらが分かりやすいか選び、理由を考える学習を行った。筆者の表現の仕方によって読み手の印象が変わることに気付き、表現の工夫とその効果についても考えることができた。児童が見つけた筆者の表現の工夫は、教室に掲示し集める。これらの活動を1年間通して行うことで、説明的な文章を読む際に児童の意識付けとなっている。

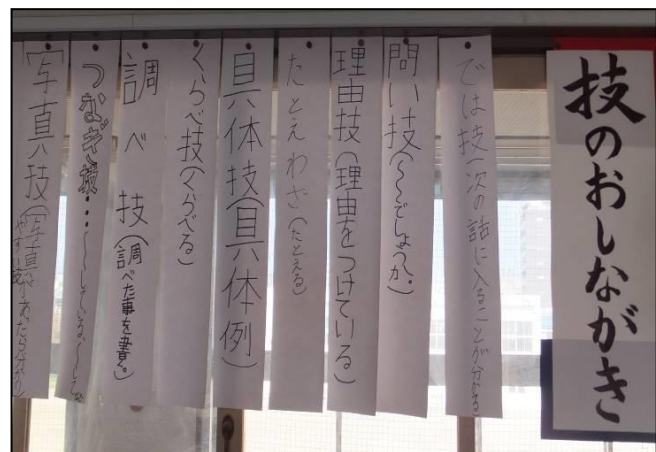
○ 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

児童が学習の見通しをもてるように学習計画を知らせた。(資料①)

Ⅱ次では、筆者の表現の工夫を「筆者の技」とし、児童が興味をもって筆者の表現の工夫を考えることができるよう工夫した。また、見つけた技は児童がネーミングを考え、「技のおしながき」に集めていくことで、意欲的に取り組むことができた。（資料②）

1	<p>初めて読んで感想を書こう。</p> <p>★おどろいたこと・分かりやすかった文や言葉、ふしぎに思ったことなどを書きましよう。</p>
2	<p>文章全体を五つのまとまりに分けよう。</p> <p>★このまとまりを見つめるポイントとは……</p> <p>(面白い)では、 ーを見つけよう。</p>
3	<p>分らない言葉やむずかしい言葉の意味を調べよう。</p>
4	<p>一つ目の問いに対する答えを考えよう。</p> <p>★どのような順番で書かれているでしょう。</p> <p>★分かりやすく説明するために、どんな技がかくれているでしょう。</p>
5	<p>二つ目の問いに対する答えを考えよう。</p> <p>★どの文が、どのさし絵を説明しているか考えてみましょう。</p> <p>★分かりやすく説明するために、どんな技がかくれているでしょう。</p>
6	<p>三つ目の問いに対する答えを考えよう。</p> <p>★分かりやすく説明するために、どんな技がかくれているでしょう。</p> <p>★分かりやすーいと思つたまとまりから、筆者の技を見つけよう。</p> <p>★これまでの技が使われているのか探してみよう。</p>
7	<p>★新しい技がないか探してみよう。</p>
8	<p>生き物のふしぎな関係ブックを作ろう。</p> <p>★いろいろな本を読んで、みんなに伝えたい生き物の関係を探してみよう。</p> <p>ヤドカリ (と) イソギンチャク</p> <p>(チョウチョくしくしなめ) を伝えたい。</p>

(資料① 學習計畫表)



(資料②) 児童が集めた技のおしながき)

○ 基礎的・基本的な知識技能の習得

最初に、説明的な文章の構成には頭括型、尾括型、双括型があることを学習し、筆者の意見を確認した。そして、「説明的な文章の家」のワークシートに筆者の意見を書くことで、内容と筆者の意見を結びつけながら学習することができた。(資料③)

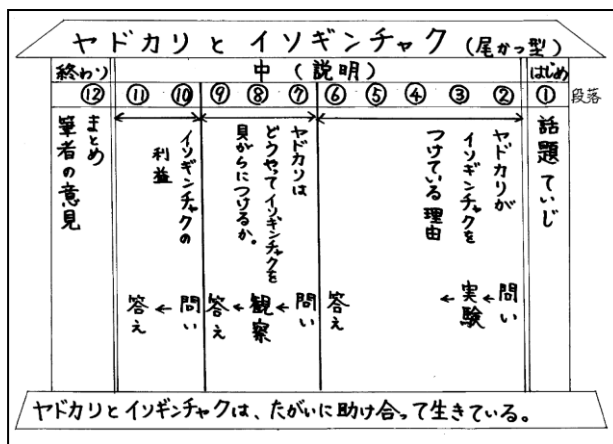
また、「問い」「実験・観察」「答え」の順に書かれていることや、筆者の思考の流れに沿って論が展開されていることに気付くことができた。拡大したワークシート教室に常掲し、読み取っていく中で分かった事柄も付けたしながら進めていった。

内容を読み取る際には、指示語にサイドラインを引き、その指示語の指す言葉を線で繋げた。これにより、内容を正確に読み取ったり、段落のまとまりをとらえたりすることができた。また、接続詞にサイドラインを引くことにより、児童は段落の結びつきや論の展開を考えて読み取ることができた。

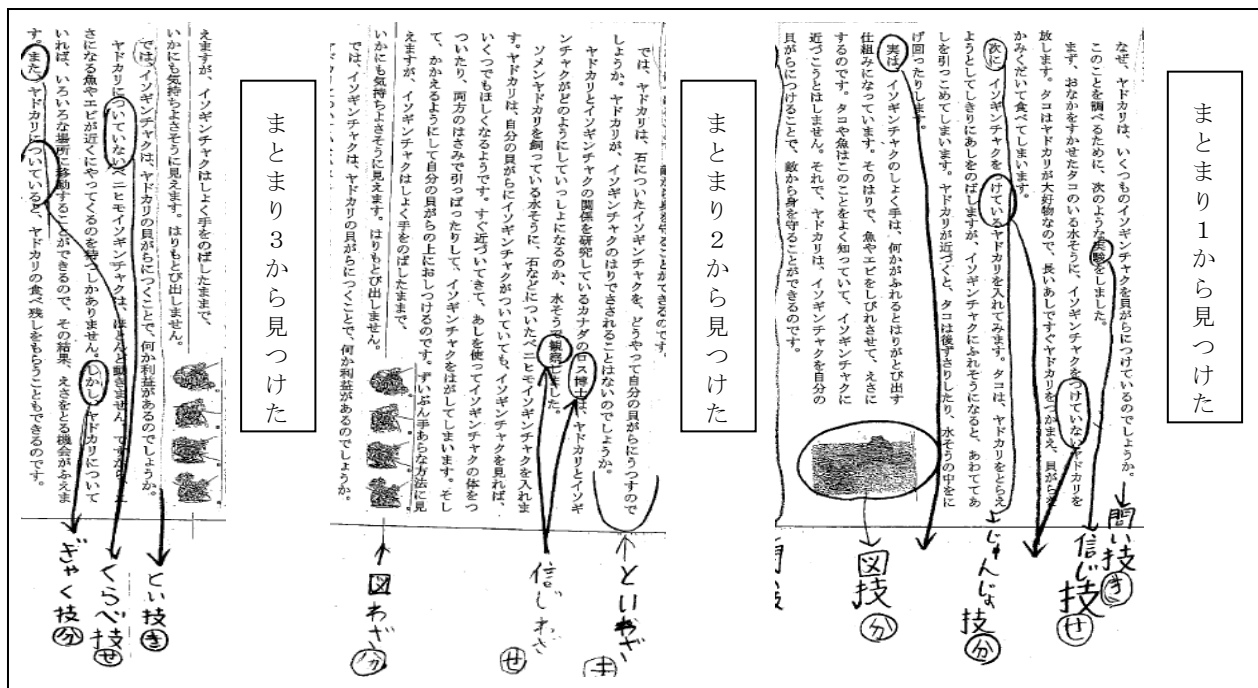
ヤドカリとイソギンチャクの関係を読み取る際には、表を用いて整理し、

対比して書かれていることを確認した。表にまとめることで視覚的になり、正しく内容を読み取ることができていた。対比して読むことにより、イメージしやすく児童が実感的に内容を読み取ることができた。また、文章を挿絵と照らし合わせて確認することで、一つ一つの言葉に着目しながら読むことができていた。

本論の三つのまとまりから、自分が分かりやすいと感じたまとまりを選び、一つのまとまりに絞って探そうにした。



(資料③ 説明的な文章の家)

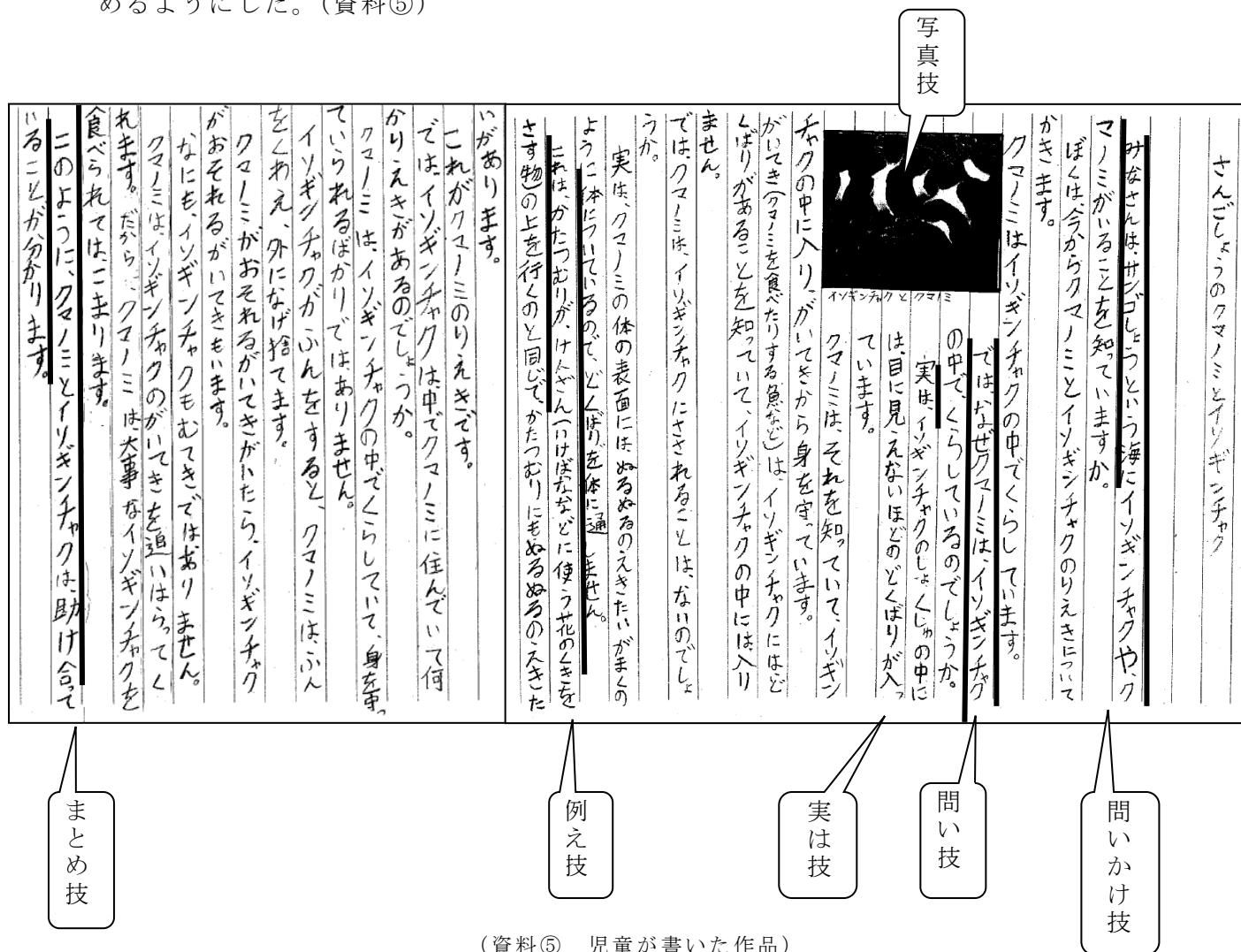


(資料④ 児童が書いた筆者の技)

筆者の表現の工夫を見つける際には、「分かりやすさが増す」「説得力が増す」「興味を引く」の三つの視点から「筆者の技」を見つけることができていた。(資料④)

本時では、新たに「信じ技」「図技」「ぎやく技」などが出た。そして、本論の三つのまともに使われている技を比較することで、筆者が内容に合わせて表現を工夫していることに気付くことができた。

Ⅲ次では、並行読書してきた本の中から書きたい生き物を選び、文章を書いた。その際には、まず付箋に書いた文章を並び替えて構成し、内容に合った技を考えるようにした。児童は、Ⅱ次での学習を活かして、文章を構成し、技を効果的に使って書くことができていた。書き上げた文章を「生き物のふしぎな関係ブック」にまとめ、いつでも読めるようにした。(資料⑤)



(資料⑤) 児童が書いた作品)

最後に、書き上げた文章を読み合い、感想を交流した。児童は、「実は技を使っているからわかりやすかった。」「比べ技があるから説得力があった。」など、技の工夫に着目して読んでいた。

毎時間の課題に対し、笑顔や泣き顔などの表情と、吹き出しにコメントを書き入れ、自己評価を行った。悲しい顔を描いていた児童に対しては、個別に対応することにより段々と笑顔を描ける児童が増えてきた。また、文章に書くことが苦手な児童も、毎時間

の課題に対して自分はどうかだったのかを簡単に表現することができ、自信を持って書くことができていた。

○ 図書の計画的な活用

本単元のⅢ次で、共生関係にある生き物について文章を書くにあたり、共生関係にある生き物について書かれた本、同作者の本を用意し、並行読書を行った。同種の生き物の本の中にも絵本や図鑑など複数用意することで、普段本をあまり読まない児童も興味を持って取り組むことができた。Ⅱ次を学習している間に、児童は書きたい生き物の情報を複数の本から探し、自分でメモに残したり、資料に線を引いたりと意欲的であった。用意した本以外にも、地域の図書館や家の本などを利用したり、パソコンで調べてきたりして必要な情報を収集している児童もいた。

本単元で説明的な文章の構成や筆者の技を学習したことで、内容だけではなく見方が広がり、説明的な文章を楽しく読む姿が多く見られるようになった。

8. 成果と課題

- 技を探すことをめあてにしていたので、文や言葉に着目することができた。
- グループでの話し合いでは、自分の考えを発表するだけでなく、友だちの意見を聞いて、感想を伝えたり質問をしたりすることで、さらに読みを深めることができた。
- ▲ 既習の技と新出の技で色を分けて書くなどし、技の整理をしていく必要があった。
- ▲ グループでの話し合いのルールを定着させると、より話し合い活動が活発になるのではないかな。

並行読書で用いた図書

・伊藤 年一	『助けあう生き物の話』	学研教育出版
・武田 正倫	『さんご礁のなぞをさぐって』	文研出版
・大方 洋二	『クマノミとサンゴの海の魚たち』	岩崎書店
・武田 正倫	『ヤドカリとイソギンチャック』	金の星社
・本川 達雄	『サンゴしょうの海』	福音館書店
・高家 博成	『こすもすと虫たち』	新日本出版社
・沖山 宗雄	『魚』	学研教育出版

第5学年の実践

国語科学習指導案

指導者 佐藤 優

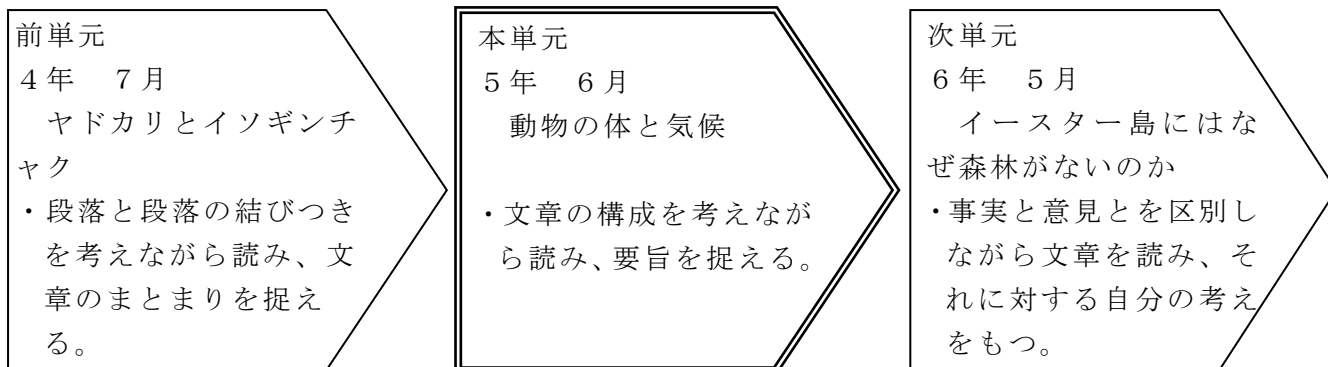
日 時 平成28年6月15日(水) 第5時限(13:45～14:30)

学年・組 第5学年3組 在籍32名

単 元 要旨を捉え、動物ブックトークをしよう

(動物の体と気候 東京書籍 5年)

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- 動物の体と気候の関係に興味を持ち、構成に注意して読んだり、進んで自分の考えを出したりしようとしている。
- ・ 文章の構成を考えながら内容を読み取り、要旨をとらえることができる。
- ・ 筆者が説明に用いている文章の構成について理解することができる。
- ・ 筆者の考えをまとめ、友だちに伝えることができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
・動物の体と気候との関係に興味を持ち、進んで教材文を読んだり自分の考えを出したりしようとしている。	・文章の構成を考えながら内容を読み取り、要旨を捉えている。 ・筆者が説明に用いている文章の構成について理解している。	・文章全体の構成を踏まえ、決めた分量に合わせて、教材文の言葉を使いながら要旨をまとめている。	・文章全体の構成を踏まえ、決めた分量に合わせて、教材文の言葉を使いながら要旨をまとめている。 ・書いた要旨を発表し合い、自分が書いたものと比べながら表現について助言し合っている

4. 指導にあたって

【児童観】

本学級では、普段から読書への関心が高いが、物語などを読んでいる児童が多く、自然関連の本を好んで読む児童は少ない。本単元の学習を通して、児童の自然分野への興味を広げるきっかけにしたい。また、朝の学習タイムに全員読みの音読の時間を学年で取り組み、声を出して読むことに親しんでいる。前単元の物語文「世界で一番やかましい音」の学習では、「設定」「展開」「山場」「結末」の部分を確認、物語の構成を考えながら、山場で起きた変化をとらえる活動を行った。文章構成について考える際に、4年生までに学習した、「はじめ」「中」「終わり」を思い起こさせた。児童は物語文にもそういった構成があるのだということを知り、構成について考える際には意欲的になった。説明文の学習において児童は4年生の時に、書かれている事実を読み取る学習をしてきている。しかし、そこから筆者の考えを自分なりにまとめたり、読み取ったことから自分の考えを発表したりする活動にはまだ慣れていない。本単元の学習を通して、単元の最後に設定したブックトークを行うために必要な力として、説明文の要旨をまとめ、分かりやすく伝える力をつけさせたい。

【単元観】

本単元の学習では、児童が学び、考える学習を進めるために、ブックトークという形をとり、読み取った内容を相手に伝える言語活動を取り入れたい。この活動を通して、学んだ内容を深め、より自分のものにできると考える。そして、相手に伝えるためには筆者の主張をつかみ、文章を読み直し、表を活用することで書かれている内容を読み取り、その要旨が的確に押さえられるものと考えたい。

本単元で付けたい言語の力を「C 読むこと」の指導事項ウ「目的に応じて文章の内容を的確に押さえて要旨をとらえたり、事実や感想、意見などとの関係を押さえ、自分の考えを明確にしながら読んだりすること。」とする。この力をつけるために、文章の組み立てに注意しながら内容を理解して要旨をとらえること、それを自分なりの方法で表現することをねらいとしている。4年生で学習した「段落と段落の結びつきを考えて、書かれた内容を正しく読み取る」という内容を発展させた、各文章の要約を通して説明文全体の要旨を読み取るための単元である。また、単元での学習を通して得た興味や関心を日常の読書生活へつなぐことも目的としている。動物ブックトークをするにあたり、動物の体と気候の間にある関係を知ることで、動物に関する他のテーマで書かれた本を読む際に、何と何にどんな関係があるのかという読みの視点につなげることができると考える。

また本教材は、児童がもつ動物への興味・関心を手掛かりとしながら、動物の体と気候との関係について、驚きや疑問を持ちながら主体的に読み進められるよう、筆者の考えが論理的に展開されている。文章構成は、序論では話題が提示され、本論では説明の具体例が示され、結論では筆者の主張で結ばれるという、一連の構成が分かりやすいものになっている。そのため、文章の構成から要旨をとらえることに適している。

【指導観】

本単元を通して、文章構成をとらえ、要旨をまとめて表現する力を身に付けさせたい。そのために、ブックトークという言語活動を取り入れる。要旨をとらえるためには文章に書かれていることを正確に読み取っていくだけでなく、意味段落相互の関係や文章全体の構成をとらえる必要がある。そのため、文章構成を整理していく活動を行う際には、それぞれのまとまりに書かれていることを短くまとめながら、要旨をまとめる活動につなげていく。

また、ブックトークをする際に有効となるポイントを押さえながら本論の内容を整理し

ていき、ブックトークに必要な視点を学習が進むごとに身に付けさせていきたい。

第Ⅰ次では、扉から題名読みをし、どんなことが書かれているのかイメージを膨らませ、話し合う。ペットなどの生き物ではなく、自然の中で生活している動物であることをおさえ、なぜこんな形をしているのかという「疑問」「秘密」「不思議」を喚起させる。その後、教材文を通読して初発の感想を交流し、動物ブックトークをしてみようという学習課題を確かめ、本単元の学習についての見通しをもたせる。

第Ⅱ次では、「体形」「体格」「毛皮」などの中心となる言葉に注目させながら、話題がどこで変わるのかをとらえさせる。文章のまとまりをとらえながら内容を読み取り、文章全体を序論・本論・結論に分ける。さらに本論部分を本論①～③の3つに分け、それぞれのまとまりごとに書かれていることを、「一般的事実」「理由や根拠」「具体例」に分けてとらえる。文章構成がわかりやすいよう、文章構成図を作り、文章の内容と構成を整理する。

ブックトークをするために、良かった点、改善してほしい点、考えたことをシンキングツールのYチャートを使い表にまとめて交流し、自分でまとめたブックトークを発表する。その際、必ず要旨をまとめ、ブックトークの中に盛り込むようにする。そのことを通して、文章の要旨をとらえることがブックトークに必要であり、第Ⅲ次で動物に関する他のテーマの本に対してのトークを行う際の手だてになることに気付かせたい。

第Ⅲ次では、動物の生態について書かれた本を読み、本の内容と筆者の考えをまとめ、ブックトークをする。まとめた内容を同じ本を読んだ人同士、違う本を読んだ人同士で交流し、文章に対する自分の感想や紹介の文章などとともに、友だちと伝え合い比べることでより端的にわかりやすい要旨について考えさせたい。

5. 学習指導計画（全7時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
Ⅰ 次	1	<ul style="list-style-type: none"> ○ 題名と写真から、教材文の内容を想像する。 ○ 教材文を通読し、初発の感想を書き、発表し合う。 ○ 筆者が何について述べようとしているのかをとらえ、要旨をまとめるという課題を確かめる。 ○ 学習の中でブックトークを行うことを知る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 題名と絵から内容を想像させ、設定を確認した上で範読する。 ・ 初めて知ったことや疑問に思ったことなども書かせるようにする。 ・ 説明文における筆者の述べたいことの中心を要旨ということを確認する。 ・ ブックトークを行うためには、筆者の主張をつかみ、まとめる必要があることを伝える。
	2	<ul style="list-style-type: none"> ○ 文章を序論・本論①～③・結論の5つのまとまりに分け、小見出しをつける。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ これまでの学習を想起させ、説明文を始め・中・終わりに分けてきたことを押さえ、序論・本論・結論への理解へとつなげる。 ・ 「体形」「体格」「毛皮」などのキーワードや、文頭の言葉に注目しながら話題の変化を捉えさせる。
Ⅱ 次	3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本論1～3を読み、動物の体と気候との関係を読み取り、表に整理する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 本論部分を「体形と気候」「体格と気候」「毛皮の役割と気候」との関係の3部分に分けさせる。 ・ キーワードを見つけ、それを使って小見出しを考えさせる。 ・ ブックトークをする際の視点となるよう、本論ごとの特徴をおさえさせる。

Ⅱ 次	4 5 本 時	<p>○ 前時までの学習を振り返りながら文章構成図を作る</p> <p>○ ブックトークをするために伝えることを整理し、グループで考えたブックトークを発表し、交流する。</p>	<p>本論１・・・２枚の写真での比較 本論２・・・図を使った比較 本論３・・・写真が１枚しかないことによる分かりにくさ など 本論１～３を通して、事実を説明するために具体例と根拠を述べていることも筆者の述べ方の工夫であることを押さえる。</p> <ul style="list-style-type: none"> 文章全体の構成がわかるように表を書かせる。 「事実」「理由や根拠」「具体例」が、どこにどのような順番で書かれているかに注目させる。本論が並列に並び、詳しく説明をしていることに注目させる。 グループでブックトークをするため、本文の中から質問・わかりやすかった点・良かった点・改善してほしい点・思ったことをブックトークメモとしてＹチャートを使って整理させる。 整理したことをまとめ、ブックトークを作り、発表する。 他の人の発表を聞いて、共通点、ちがい、わかりやすかった点について発表する。
Ⅲ 次	6 7	<p>○ 動物の体について書かれた他の本を読み、要旨をまとめる。</p> <p>○ 動物の体について書かれた他の本を読み、同じ本を読んだ人同士、違う本を読んだ人同士で、自分の読んだ本についてブックトークをする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> 前時までの学習を生かし、「事実」「理由や根拠」「具体例」などに注目しながら、文章全体を通して筆者の最も伝えたいことは何かを考えさせる。 Xチャートを使い、本の内容を整理しながら要旨をまとめる。 前時までの学習を想起させ、ブックトークをするにあたって必要になる筆者の述べ方の工夫を見つけるよう助言し、それをブックトークに盛り込むようにさせる。 同じ本を読んだ人同士での交流で、自分のまとめた内容に足りなかった部分や、ブックトークに使えるところを伝え合い、違う本を読んだ人同士での交流時によりわかりやすく伝えられるようにさせる。 友達と比べて似ているところ、違うところを考え、より分かりやすい要旨のまとめかたについて振り返る。 前時で学習したように、その本で筆者の最も伝えたかったことは何かということをまとめるよう助言する。

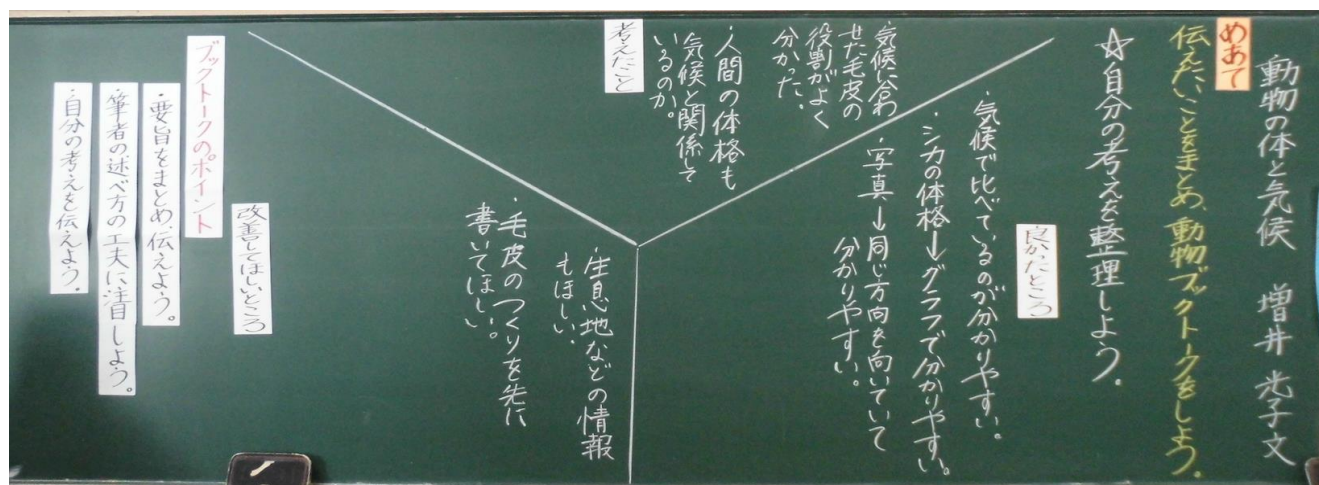
6. 本時の学習

① 本時の目標

- ・伝えたいことをまとめ、グループでブックトークをすることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 本時の課題を確認する。	▼ 本時の課題を板書し、全員で読んで確かめる。
	伝えたいことをまとめ、動物ブックトークをしよう。
2. 教材文を読む。	○ 本文を音読しましょう（段落読み）。 ★ この文章を読んで、自分はどうか考えましたか。
3. 前時までに整理した文章構成図を参考にしながら、Yチャートを使って自分の考えを整理しましょう。	▼ ブックトークをする際の言葉の使い方を書いた台本 ○ これからブックトークをするためにYチャートを使って自分の考えをまとめましょう。 ① わかりやすかった点・良かった点 ② 改善してほしい点 ③ 思ったことを書き出し、自分の考えを整理する。
4. 台本を書き、それをもとにブックトークをする。	○ 自分でYチャートを使い整理したことをまとめて、台本を書きましょう。台本の中に要旨を必ず入れるようにしましょう。 ○ ほかに子の発表を見て、共通点、ちがい、わかりやすかった点について発表しましょう。
5. 次時から動物に関する他の本を読んでいくという学習について知る。	○ 次の時間からはこれまでの学習を生かして動物に関する他の本を読んで、要旨をまとめ、ブックトークをする活動をしていきます。



7. 指導を終えて

(1) 学年の取り組み

5年生では、読むことに親しむために朝の学習の時間を利用して音読を続けている。本

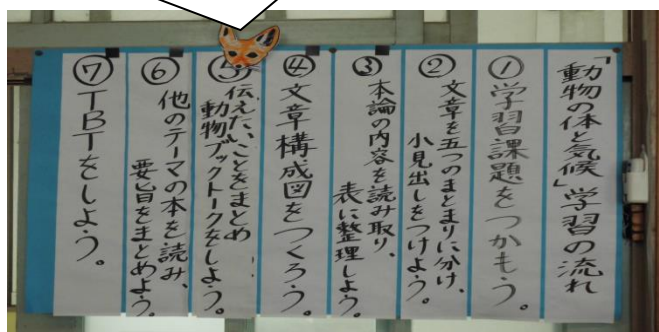
単元では、児童が学び、考える学習を進めるために、ブックトークという形で、読み取った内容を相手に伝える学習活動を取り入れた。児童がより興味をもって取り組めるようにするために、児童数分の図書を東淀川図書館から取り寄せ、その中から本を選べるようにした。また、単元の学習計画と既習の内容を教室に掲示し（資料①、②）、学習の見通しをもち、いつでも振り返りながら学習を進められる環境を整えた。また、本単元で使用したYチャートやXチャートなどのシンキングツールについては、国語科だけでなく社会科の調べ学習でも使用した。児童は、考えを視覚的に分かりやすく整理できるため、容易に情報を観点別に振り分け、整理することができた。これからも単元や教科を限定せずに継続して使用し、定着を図りたいと考えている。

（２）本実践の考察

○ 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

学年当初より教室内に話型、ハンドサインを掲示し、国語科に限らず、話し合いがスムーズに行えるようにした。また本単元の学習では、子どもたちがめあてをもって主体的に学習を進めるために、Ⅲ次で行う言語活動を常に意識することが大切と考えた。Ⅲ次では、T B T（豊里ブックトーク）をするという学習計画を立てた。児童は「いろいろな本が読めて楽しそう」「たくさん本を読みたい」とうれしそうに話している姿が見られた。Ⅲ次までの見通しをもつことができるようにするために、掲示物を工夫した。（資料①）今、どんな学習をしているのか、これからどんな学習をするのかが一目で分かるようにしたので、意欲的に学習を進めることができた。また、既習内容を掲示したので、それを振り返りながら、学習を進める児童もいた。（資料②）

学習が進むたびに、フェネックを動かしていく。



（資料① 学習計画が一目で分かるようにした掲示物）



（資料② 既習内容の掲示）

Ⅲ次で、児童がT B T（豊里ブックトーク）をしたときには、友だちの話を聞いて、「そんなつながりってあるんや」「動物の体って面白いな」と動物の生態について、より興味をもつことができた児童も多かった。

○ 基礎的・基本的な知識・技能の習得

まず、序論・本論・結論に分けた。そして、中心になる言葉を手掛かりに、本論のどこで話題が変わるのかを考えさせた。中心になる言葉として、児童は、「体型」・「体格」・「毛皮」という言葉に着目した。それぞれのまとまりで中心になっている言葉をしぼることで、本論が大きく三つに分かれていることに気づくことができた。

次に、本論の三つのまとまりを読み比べた。共通している点について児童は、「寒い地方」・「暑い砂ばく」など言葉は変わるが、「気候」と関連付けて、説明が展開されていることに気づいた。さらに、取り上げられている動物名（具体例）、何についての説明か（一般的事実）、動物にそのような特徴がある理由（理由・根拠）の3点について、違いを考えさせ、表にまとめた。キーワードに気を付けながら、短くまとめるよう促すことで、児童は、一目で内容のつながりがわかるように工夫してまとめることができた。（資料③）

6月10日 金			動物の体と気候	
めあて 本論の内容を読みとり、表に整理しよう。			増井光文	
本論3	本論2	本論1	事実	理由や説明 具体例
寒い地方にすむ動物は、防寒用のすぐれた毛皮を身につけている。	寒い地方にすむ動物は、同じ種類ではあたたかい地方にすむものより、毛皮が太く、厚い。	寒い地方にすむ動物は、同じ種類ではあたたかい地方にすむものより、毛皮が太く、厚い。	寒い地方にすむ動物は、防寒用のすぐれた毛皮を身につけている。	寒い地方にすむ動物は、防寒用のすぐれた毛皮を身につけている。
暑い地方にすむ動物は、防熱用のすぐれた毛皮を身につけている。	暑い地方にすむ動物は、防熱用のすぐれた毛皮を身につけている。	暑い地方にすむ動物は、防熱用のすぐれた毛皮を身につけている。	暑い地方にすむ動物は、防熱用のすぐれた毛皮を身につけている。	暑い地方にすむ動物は、防熱用のすぐれた毛皮を身につけている。
寒い地方にすむ動物は、防寒用のすぐれた毛皮を身につけている。	寒い地方にすむ動物は、防寒用のすぐれた毛皮を身につけている。	寒い地方にすむ動物は、防寒用のすぐれた毛皮を身につけている。	寒い地方にすむ動物は、防寒用のすぐれた毛皮を身につけている。	寒い地方にすむ動物は、防寒用のすぐれた毛皮を身につけている。
暑い地方にすむ動物は、防熱用のすぐれた毛皮を身につけている。	暑い地方にすむ動物は、防熱用のすぐれた毛皮を身につけている。	暑い地方にすむ動物は、防熱用のすぐれた毛皮を身につけている。	暑い地方にすむ動物は、防熱用のすぐれた毛皮を身につけている。	暑い地方にすむ動物は、防熱用のすぐれた毛皮を身につけている。

（資料③ 本論の内容を表にまとめた）

この表にまとめた事柄を基に小見出しをつけた。表にまとめることで、内容を整理できていたため、どの児童も小見出しを無理なく考えることができた。

さらに、文章構成図を考えた。それぞれの考えた図を交流するときには、図を示し、本文のどこから（根拠）、どのように考え（理由）、示した図になったのかを話すようにした。そうすることで、各自がなぜそのようなつながりにしたのかを交流し合うことができた。

最後に、Ⅱ次での動物ブックトークを行った。ここでは、Ⅲ次で行うブックトークに向けて、Yチャートを使い、ブックトークの台本にまとめた。Yチャートに分類する観点は、「わかりやすかった点・良かった点」「考えたこと」「改善してほしいこと」にした。まずは、同じ観点にして、Yチャートの使い方を理解させたいと考えたからである。Yチャートを使うことで、伝えたい内容を分類して、整理することができた。（資料④）

わたくしが紹介する本は 動物の体と気候 である。
この本で筆者が伝えたいことは、
動物たちの体はそれぞれに、すんでいる場所の気候
や風土にあうようにできているということと、動物た
ちの体は自然が長い年月を作り上げてできた最良
の、さくどだということである。
文章の流暢さとしては、
写真やグラフなどがある、てくうべているものとのち
がいがよく分かります。よく良かったです。
改訂してほしいことは
シカの毛皮にちうがいがあると思ふかう、それと分か
るように書いてほしいです。
この本を読んで
前は、体格や体形、毛皮のことはあまり知りませんでしたが、
この本を読んで、動物の体は自然が長い年月をかけて
作り上げた、さくどだ、といういろいろな動物の
ことを知りたくくなりました。

動物の体と気候
増井 范子 文

ふえた、ひまわりなどの植物が、グレート・ワットをこよう。
グレート・ワットを使って自分の考えを表現しよう。

シカのつのも
北から南にいくにつれて変わって
いるのだろうか。

ふねろとわづりやツネの軍馬をくらべたら、
耳の大きさや体形のちがいなどがよく分かったの
で良かったです。

シカの体格の変わり方がグーッがあてとて
よく分かりました。

シカの毛皮もちがいがあんな
うすれも分かるように書い
てほしいです。

雪だるま

Ⅲ次のテーマ別動物ブックトークでは、Ⅱ次で学習した方法を使い、自分の好きな本を選んでブックトークの準備をした。まず、同じ本を選んだ人同士で班を作り、交流した。その際、Ⅱ次では、Yチャートのみを使ったが、Ⅲ次では、読みの観点や本の特性に合わせてXチャート（資料⑤）も使い、伝えたい内容を自分の考えた観点で分類し、整理することにした。

[illegible]

(資料⑤ Xチャートを使ったワークシート)

児童は、友達の見解を聞くことで、自分の気づかなかった部分にも目を向け、読みを深めることができた。次に、違う本を読んだ人同士でもグループを作り、交流した。この時、同じ本を読んだグループでの交流が自信につながり、児童は意欲的にブックトークに取り組んでいた。(資料⑥)



(資料⑥ ブックトークの様子)

○ 図書の計画的な活用

Ⅲ次でのT B T (豊里ブックトーク)を行うにあたり、教材文である動物の体と気候に関連した本だけでなく、動物の生態など、幅広いテーマの本を集めた。写真や図表が多く用いられており、それに関する説明がきちんと書かれているもの、また、児童があまり知らないことを書いていると考えられる本を意図的に選んだ。グループで活動できるように、どの本も4冊ずつ用意した。図書の中には動物の体と気候の筆者である増井光子氏の著書も数種類用意し、同一筆者の本を読み比べることで、筆者の考えをより深めることができたようにした。教材文と違って、どこに要旨が書かれているのか、本によって違うにも関わらず、児童は、本の題名や図表などに関連させながら、文章の重要な点を的確に押さえ、要旨をまとめ、紹介し合うことができた。T B Tの後、友だちが紹介していた本について、興味をもち、休み時間や読書タイムなどに読んでいる児童もいた。

8. 成果と課題

- ブックトークをするために一人一人が自分の考えを出し、伝え合うことができた。
- 単元を通して、要旨をまとめるということを意識しながら読む児童が増えた。
- シンキングツールを使い、自分の考えを整理することができた。
- ブックトークをすることで、読書に対して意欲的になった。
- ▲ 児童の思考にあったワークシートの活用の仕方を探る。

ブックトークに使用した図書一覧

どうぶつのからだシリーズ（著者 増井光子）

- ・ どうぶつの目
- ・ どうぶつの鼻
- ・ どうぶつの耳
- ・ どうぶつの手と足
- ・ どうぶつのしっぽ

動物のちえシリーズ（著者 成島悦雄）

- ・ 食べるちえ
- ・ 身を守るちえ
- ・ 育てるちえ
- ・ 眠るちえ
- ・ とともに生きるちえ

森の写真動物記シリーズ（著者 宮崎学）

- ・ けもの道
- ・ 水場
- ・ ワシ・タカの巣
- ・ ガラパゴス（著者 ジェイソン・チン）
- ・ ダーウィンが見たもの（著者 ミック・マニング）
- 大草原のノネコ母さん（著者 伊澤雅子）

第6学年の実践

国語科学習指導案

指導者 上田 学

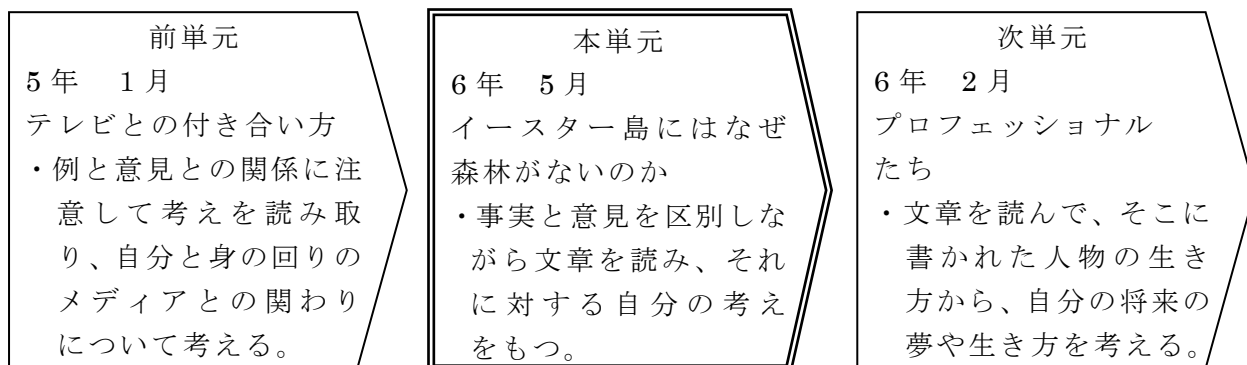
日 時 平成28年5月25日（水）第5校時（13：45～14：30）

学年・組 第6学年2組（在籍32名）

単 元 人と森林の関わりについて書こう

（「イースター島にはなぜ森林がないのか」 鷲谷 いづみ 東京書籍 6年）

1. 教材間の関連



2. 学習目標

- 『REC』（Ropy Environment Conference）³をするという見通しをもち、森林の役割についての自分の考えを表現しようとする。
- ・ 事実と意見との関係に注意して、自分の考えを明確にしながら筆者の主張を読み取ることができる。
 - ・ 文章を読み、筆者が説明に用いている文や文章の構成について理解することができる。
 - ・ 教材文や関連図書、ネット情報を活用して、事実と意見とを区別して自分の考えを書くことができる。

3. 評価規準

国語の関心・意欲・態度	読む能力	書く能力	言語に関する事項
・ 題名や文章の内容に興味をもち、進んで感想を発表したり文章を読んだりしようとしている。	・ 事実と意見とを区別しながら、筆者の主張を読み取る。 ・ 文章を読んで考えたことを発表し合い、自分の考えを広げたり深めたりしている。	・ 書いた文章が自分の考えを明確に表したものであるか、表現の効果を工夫している。 ・ 事実と意見との関係に注意しながら、自分の考えを書くことができる。	・ 筆者が説明に用いている文や文章の構成について理解している。 ・ 自分の考えを明確にしながら、書く事柄を収集し、整理して書いている。

³ 6年の合言葉と環境会議の意味から、「6年生による人と環境の関わり方についての会議」という意味の指導者による造語。

4. 指導にあたって

【児童観】

本学級では、ほとんどの児童が国語の学習に進んで取り組んでいる。4月教材「サボテンの花」では、サボテンと風の考えを比較して、物語の感想を自由に表現した。「サボテンの生き方に共感できる」、「風の意見に賛成である」など様々な意見がでた。また、「生きる」では、文末の「～ということ」に着目し、自分たちで詩をつくる活動をした。感じたことを自分らしく夢中になって取り組むことができた。

説明文については、前学年単元の「テレビとの付き合い方」で、意見と具体例との関係に注意して筆者の考えを読み取り、自分の意見を発表しあった。そして、教材文をもとに自分の選んだメディアに対する意見文を書く活動をした。意見文については、どの児童も興味深く取り組んでいたが、文章構成を考えながら自分の意見を書くことは十分でなかった。それは、教材文を読み取るなかで、それぞれの段落やまとまりと全体の構成をとらえることが不十分だったからだと考えられる。そこで、自分の考えを明確にしながらその理由を書いていく等、文章構成について学習をしていく。また、段落を整理し意見と事実との関係に着目しながら教材文の要旨をおさえ筆者の主張を読み取らせたい。また人と森林のかかわりについて書いた自分の意見文を全体で交流する場を工夫し、書くことの意欲づけをしたい。

【単元観】

児童の実態を受け、つけたい言語の力を「B書くこと」の指導事項イ「自分の考えを明確に表現するため、文章全体の構成の効果を考えること。」とする。この力をつけるために「筆者の主張に対する自分の考えを表現する」という言語活動を位置づけた。本教材は、かつて豊かな森林のあったイースター島から、なぜ森林がなくなってしまったのかが島の歴史をなぞるように書かれている。イースター島の森林消失の過程を紹介することで持続可能な社会の重要性について主張する文章であり、これまでの自分の知識や経験を生かしながら、文章に対する自分の考えをもつことができる。序論・本論・結論の構成のもとに筆者の主張が展開されており、文章の構成と、事実と意見の関係を押さえながら筆者の主張を読み取ることに適している。また、イースター島の事例を学ぶことで、環境破壊が文明の崩壊に至る可能性のあることや、外来生物の持ち込みが日常的に行われている中で、自然が微妙なバランスの上で成り立っていることが理解できる。そして、生態系という視点で環境問題をとらえ、持続可能な社会の構築こそが人類生存のカギであるという認識をもたすことができると考えられる。教材文を通して人と環境の関係に関心をもたせることができ、並行読書として生態系や環境についての本を読み、自分の考えを深めることにも適している教材であると考えられる。

【指導観】

第Ⅰ次では、5年で学習した「森林のおくりもの」や社会科で学習した「森林のはたらき」等、これまでの学習を想起させてから、題名読みをする。イースター島や「森林がない」状態、その理由などを話し合う中で、読みのかまえをもつ。その際、写真や地図、資料を使い、イースター島をよりイメージさせたい。その時、本文を通読し初発の感想を書く。初発の感想を、交流していく中で学習計画を立てる。そして単元の最後には、人と環境の関わり方についての会議『R E C』（Ropypy Environment Conference）をするという見通しをもたせ学習の意欲を継続させたい。

教材文を読み進めていくために、まず、序論・本論・結論の三つの大きなまとまりにわ

け文章の構成をつかむ。序論ではイースター島を知ることで「イースター島にはなぜ森林がないのか」について関心をもたせたい。

第Ⅱ次では、まず、人間とラットがイースター島に上陸した経緯についてまとめていく。そして本時では、イースター島から森林が失われた原因をまとめていく。原因は何か考えながら音読していく。その際、「である」「なっている」などの事実について書かれていることと、「ちがいない」「はずである」などの考えを書いている部分では文末表現に違いがあることに気づかせたい。また、推量表現は事実かどうかわからない、決めつけることはできないということを、話し合いを通して理解できるようにする。本論の内容はシンキングツールの一つであるコンセプトマップを用いてまとめていく。コンセプトマップを使って分類・整理することで、情報の関連付けをしながら思考を深めることができる。また、視覚化することで、思考を友だち同士で共有し、交流しながら考えを深めていくことができると考えられる。書かれている順序や接続語に着目し矢印や記号を用いて人が見て分かりやすいように工夫させたい。そしてコンセプトマップで整理した情報をもとに内容をまとめていく。森林が失われたのは人間とラット、どちらにより原因があるのかについて考える。人間とラットの責任を「配分グラフ」に表し、とらえた内容を参考にして自分なりの考えをもちたい。交流活動では、それぞれの考えの違いに気づき、友だちのよさを認め合いながら、自分の考えを広げたり深めたりすることにつなげたい。

第Ⅲ次では、人と森林の関わりについて、関連図書やネットの情報等を活用しながら、自分の考えを書いていく。筆者の論の進め方や段落構成を参考にするようにしたい。そして『R E C』（Ropypy Environment Conference）を開催し、意見を交流し、より人と森林についての考えを深めさせたい。

5. 学習指導計画（全9時間）

次	時	学習活動	支援のあり方（発問・助言・補説 等）
Ⅰ 次	1	○ 題名読みをする。	・ 題名や写真、写真の下本文を読み、教材文の内容を想像させる。題名が課題になっていることを押さえる。
	2	○ 初発の感想を書く。 ○ 感想を交流し、学習の見通しを立てる。	・ 初発の感想として初めて知ったことを書き、学習活動のイメージをもたせる。 ・ 感想を交流し、単元の最後に人と環境についての意見文を書き、環境会議R E Cを開くことを知らせる。
Ⅱ 次	3	○ 序論の内容を読みとる。 ○ 本論（4～7段落）の内容を読みとる。	・ イースター島についての情報を読み取る。 ・ 人間とラットが上陸した経緯を読み取る。 ・ ポリネシアン人上陸時のイースター島の様子やラットの逃亡について読み取る。
	4 本時	○ 森林が失われた原因を読み取りまとめる。	・ シンキングツールを用いて、本論（8～20段落）をまとめる。 ・ 森林が失われた二つの原因と三つの目的を読み取り、人間とラットのどちらにより責任があるのかを考える。

	5	○ 森林破壊がイースター島にもたらしたものを読み取りまとめる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ シンキングツールを用いて、本論(22～24段落)をまとめる。 ・ 森林破壊が食糧不足を引き起こし、結果として人口が減少したとする説明を読み取り、自分の意見を考える。
	6	○ 結論の内容を読み取り全体の要旨と筆者の主張をとらえる。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 段落同士のつながりを意識して筆者の主張を読み取る。 ・ イースター島の歴史から教えられる教訓の内容や今後の人類の存続にかかわる文化についての書き手の考えを読みとり、自分の考えをもつ。
	7	○ 筆者の主張に対する自分の考えを書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 筆者の論の進め方や、筆者があげている例について話し合い、筆者の主張に対する考えを書く。
Ⅲ 次	8	○ 人と森林の関わりについて自分の考えを書く。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教材文や関連図書、ネット情報を活用して自分の意見を明確にして書く。
	9	○ RECを開く	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分の考えを友だちの考えと比べながら交流し、深める。

6. 本時の学習

① 本時の目標

- ・ 森林が失われた原因について、事実とそれに基づく筆者の考えを読み取り、まとめることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
1. 本時の課題を確認する。	○ 前時をふりかえり、本時の課題を確認する。 ★ イースター島の森林はなぜ失われてしまったのか考えよう。
<div style="border: 1px solid black; padding: 10px; text-align: center;"> 森林が失われた原因について、筆者の考えをまとめよう </div>	
2. 森林が失われた原因について、因果関係をたどりながらまとめる。 ・ 教材文を読む。 ・ ワークシートにまとめる。 ・ 友だちと交流する。	○ 何が原因で森林が失われたのか注意しながら音読しましょう。 ○ 書かれている順序や接続後に気をつけながら、シンキングツールを用い、内容をまとめましょう。 ◎ 文章の中の言葉を使うようにする。 ▼ 友だちの意見を参考に、自分の考えを書き直したり、付け加えたりするようにしても良いようにする。 ▼ 知りたいことや不明なことは、質問するようにする。 ◎ 原因1と原因2の文末表現の違いに気づくようにする。 {評価} 文中の言葉を使ってまとめているか。

3. 人間とラットの責任について考えよう。 ・「配分グラフ」用いて考える。 ・まとめたものを発表する。 4. ふりかえり。	○ 配分グラフを用いて、理由を考えながら人間とラットの責任の配分を考えましょう。 ◎ 次時もシンキングツールを用いて森林破壊がイースター島にもたらしたものをまとめていくことを伝える。
--	--

本時の板書

人間	ラット
・人間がラットを持ち込んだのが全ての始まり。 ・人間も生きるために木をつかったから仕方ない ・手遅れになる前に人間にはできることがあったはず。	・人間がラットを持ち込んだのが全ての始まり。 ・人間も生きるために木をつかったから仕方ない ・手遅れになる前に人間にはできることがあったはず。

イースター島にはなぜ森林がないのか

ラット

人間

まとめ イースター島から森林がなくなった原因は二つある。一つ目は、島に移り住んだ人々が様々な目的で森林を切り開いたからである。もう一つは、外来生物ラットの繁殖により、森林の再生がさまたげられたからである。

イースター島にはなぜ森林がないのか
めあて
森林が失われた原因について、筆者の考えをまとめよう。
鷲谷 いづみ

7. 指導を終えて

(1) 学年の取り組み

本単元では、人と森林の関わりについて書くという言語活動を設定した。児童の意欲を継続させるためにⅢ次に人と森林の関わりについての会議(『REC』(Ropy Environment Conference))をすることにした。

本文を学習するなかで、段落を整理し、意見と事実との関係に着目しながら教材文の要旨をおさえ筆者の主張を読み取らせた。そして、自分の考えを明確にしながらその理由をまとめていくことにした。筆者の考えや論の進め方をとらえるために、シンキングツールを用い自分なりに説明文の読みを進めていくようにした。シンキングツールを用いたことで、たくさんの情報の中から必要なものだけを取り出し、それらを整理したり、まとめることができるようになった。

また、『REC』に向けて、選書の機会と読書量を確保するために環境問題について書かれた本を集め、学級文庫に置き休み時間などいつでも読めるようにするなど教室の環境作りに努めた。読書環境の充実と授業の中で並行読書をすすめることにより、相違点や類似点を見付けられることにつながった。そして、情報の中から必要なことを選択して読み取り、それらを、話す、書くといった自分の考えを表現するための材料として取り入れることができるようになってきた。

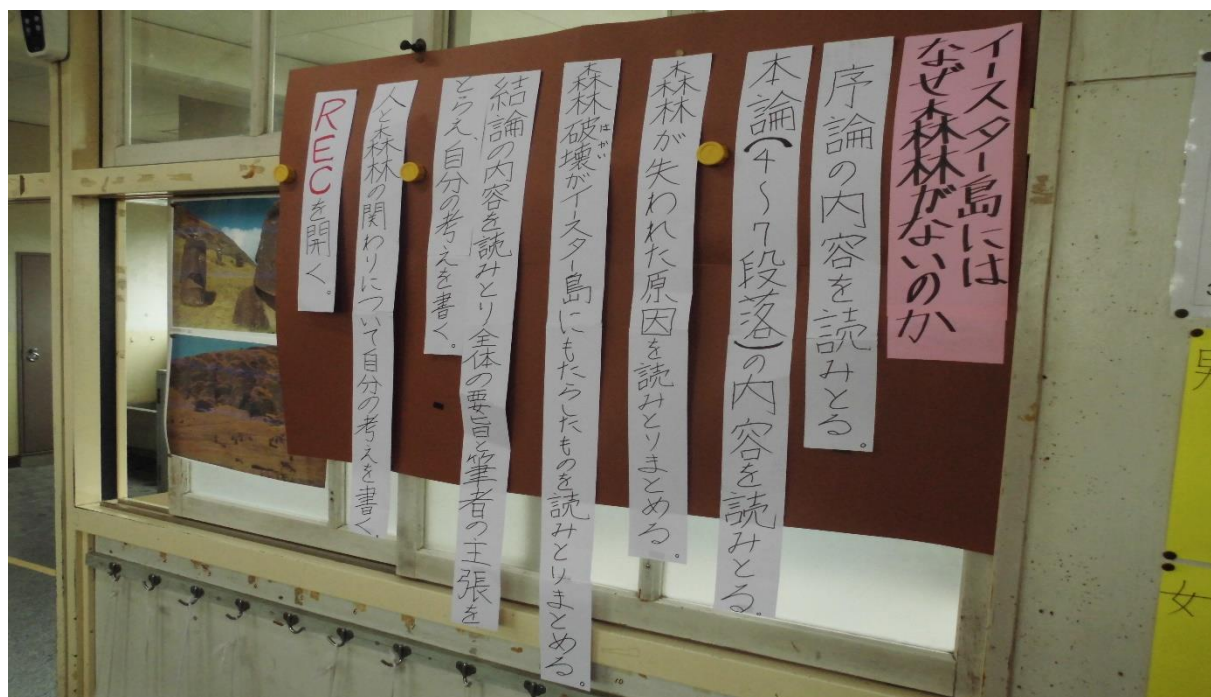
(2) 本実践の考察

○ 学習意欲の向上を図る言語活動の工夫

子どもたちがめあてに向かって主体的に学習を進めるには、単元の出口となるⅢ次の表

現活動を常に意識できることが大切だと考えた。そこで単元を見通し、どの段階でも児童がⅢ次の言語活動を意識できるように学習計画を常掲した。その結果、児童は毎時間の課題と次時へのつながりが明確になり、学習意欲の継続につながった。

(資料①常掲した学習計画)



また、書く活動においてはコンセプトマップを用いた(資料②)。このコンセプトマップでは文章の中から必要な情報だけを取り出してグループ分けをしていく。それぞれのつながりを見つけやすく、文章の内容をより深く理解することができた。多くの児童が課題に対して、論理的にまとめていた。読むことや、書くことが苦手な子どもたちも普段より取りかかりが早く、しっかりとした文章が書けていた。

○ 基礎的基本的な知識・技能の習得

導入(I次)では全文を通読したあと、イースター島やモアイ像についての知識や本文を読んで考えたことを交流した。児童からは「イースター島にあるモアイ像は世界の七不思議らしい。」「モアイ像は先祖を祀るために作ったとテレビで見た。」といったことや、「モアイ像はなぜつくられたのか」「なぜポリネシア人は島にやってきたのか」などの疑問が発表され、イースター島やモアイ像を知ることの学習に高い関心をもつことができた。

Ⅲ次では、ネット情報や関連図書を用いながら、「人と森林との関わり方」について意見文を書いた。また、自分の思っていることをうまく表現することのできない児童への書くための手立てとしてワークシートを取り入れることで自分の考えを論理立てて書くことができた。『REC』(Roppy Environment Conference)では書いた意見文を発表し、友だちが読んだ意見に対する自分の意見を交流し合った。しかし、意見に対する疑問や付け足しなどはあまり出ず、「賛成」「反対」にこだわり、交流によって自分の考えを広げたり深めたりできたとはいえなかった。

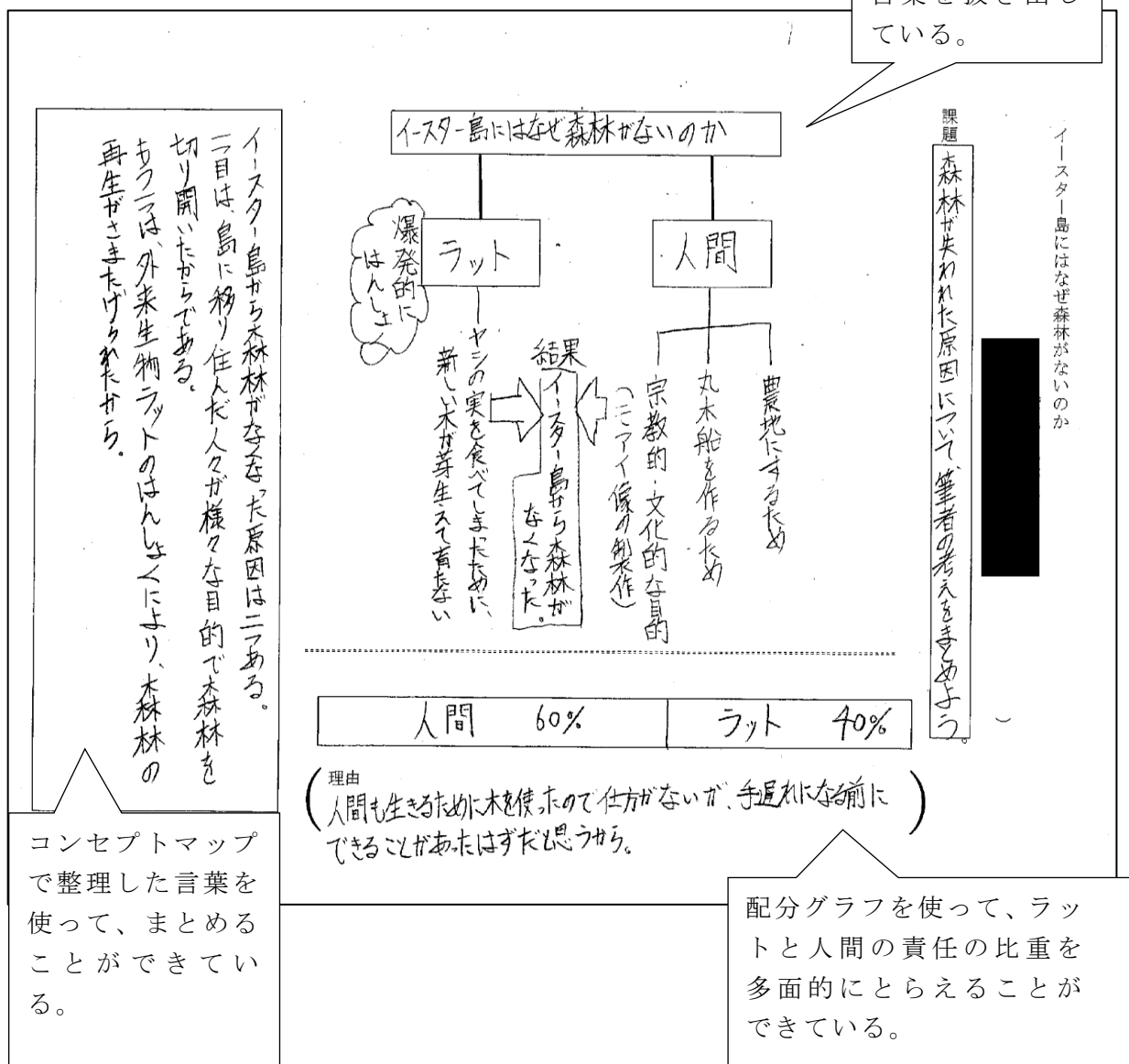
授業のまとめとして「配分グラフ」(資料②)を使って、ラットと人間の責任の比重について、具体的に数値にあらわし、自由に感想を書いた。「人間がラットを持ち込んだことがそもそもの原因だ」、「ラットが繁殖した後でも、何か人間にはできたことがあるんじゃないか」といった人間が森林を破壊した原因とする意見や、「生きて行くために森林を伐採することは仕方ないことだ」といった意見も多く見られた。評価に関しては、本文に

ないことでも、自由に書いてよいこととしたので、様々な視点から意見を書いていて物事を多面的に見ることができていた。

○ 図書の計画的な活用

多読につなげるために、並行読書に取り組んだ。本単元のⅢ次で、「人と森林との関わり方」について意見文（資料③）を書くにあたり、森林問題とそれに対する人間の関わり方について書かれた本を教室に用意し、いつでも読むことのできる環境を整えた。本だけでなく、インターネットを使って必要な情報を収集する児童もいた。

<第Ⅱ次でまとめたもの>（資料② コンセプトマップと配分グラフ）



森林破壊が進んでいる国の一つにインドネシアという国があります。インドネシアでは「違法伐採」が問題になっています。世界でも沢山の熱帯雨林のあるインドネシアは現在もとても違法伐採に悩まされている国の一つにあげられているのです。インドネシアでは伐採木材の73%が違法といわれています。

では違法伐採とは、普通の森林伐採とどう違うのでしょうか。インドネシアにはインドネシアの法律があります。その法律に違反して森林を切ることを違法伐採といいます。取り締まろうとしても広大な森林の中では警察の目が行き届かないため、取り締まることができないのです。

違法伐採が進むことで森林破壊が進み、沢山の問題がおこってしまいます。例えば、そこに住んでいる住民は森林と一緒に文化を築いてきました。森林破壊が進むことによってつみのない人たちの生活をもうばってしまうのです。

こんな大きな問題をひきおこしている違法伐採ですが、日本にもそんな違法に伐採された木材が、家具や紙等の形で輸入されているそうです。わたしはこの問題を知って、海外から輸入された木材を使うのではなく、できるだけ日本の木材を使うように心がけたいと思いました。木を大切にしていくなを忘れないようにしたいです。

具体的な森林問題の例をあげ、自分自身が森林とどのように関わっていくのかが書かれている。

8. 成果と課題

- 学習課題を教室に掲示することで、学習内容を振り返ることができた。
- シンキングツールを用いたことで、必要な情報だけを取り出して整理できるようになった。
- ▲ 話し合い活動では「賛成」「反対」にこだわり、交流によって自分の考えを広げたり、深めたりできたとはいえなかった。

並行読書に用いた図書

生物の消えた島 田川日出夫 文／松岡達英 福音館書店
生物多様性の大研究 小泉武栄 監修／PHP 研究所
鉄は魔法つかい 畠山重篤 著／スギヤマ カナヨ 絵／小学館
川のいのち 文／立松和平 絵／横山桃子
山のいのち 文／立松和平 絵／伊勢英子
田んぼのいのち 文／立松和平 絵／横山桃子
すぐできる環境調査4 川や海で調べよう 監修／梅澤実
水をきれいにするためにできること 監修／奈須紀幸
地球環境子ども探検隊 森や原っぱで環境を考えよう 著／山岡寛人 フレーベル館
地球の環境問題シリーズ2 地球から森が消えていく 編／奈須紀幸・伊藤和明 ポプラ社
環境とリサイクル ものづくりと再生のしくみ 紙 監修／半谷高久 文／本間正樹
地球の環境問題シリーズ1 大気汚染から地球をまもれ！ 編／奈須紀幸・伊藤和明 ポプラ社
地球の環境問題シリーズ3 人間のいのちをささえる土 編／八幡敏雄 ポプラ社

なかよし学級の実践

生活単元学習指導案

指導者 井辺 政夫
前川 裕美
佐藤 久子
池原 ひふみ

日 時 平成 28 年 11 月 30 日（水）第 3 校時（10：45～11：30）
学年・組 なかよし（在籍児童 23 名の内 8 名）
場 所 なかよし教室①
単 元 「買い物ごっこをしよう」

1. 単元目標

- ・ 班の話し合いや活動に積極的に参加し、人とのコミュニケーションのしかたを身につける。
- ・ 順番を待ったり役割を交代したりしながら友だちと一緒に、楽しく活動することができる。
- ・ 日常生活の中で使えるように、人とのかかわり方、文字や数・お金の計算などそれぞれの児童のニーズにあった活動をすることができる。

2. 指導にあたって

【児童観】

なかよし学級在籍の児童は、個々の障がいや発達段階が異なるため、課題も一人一人異なっている。なかよし学級には算数の学習をしに来る児童が多いが、音読や漢字学習が苦手だったり、人とのコミュニケーションがうまくとりにくかったりする児童もいる。

なかよし学級での算数科の学習では、学年の単元にそって学習を進める児童と本人の発達段階にあわせた課題を学習する児童がいる。それぞれの児童のニーズにあわせて、算数の学習の他に音読・読解・漢字学習・百人一首・ことわざかるた・ソーシャルスキルかるたなど織り交ぜた支援、指導をしてきた。2 学期からは一人学習もできるように「わくわくチャレンジ」として児童一人一人の課題に応じたプリントを 1 日 2 枚ずつ取り組んでいる。個別学習では児童のニーズに合わせた内容をするに加え、お金の絵で計算したり教材用のお金のやりとりをしたりして学習を進めている。

【単元観】

本校は今年度「国語」を研究教科として取り組んでいる。算数科の学習でなかよし学級にくる児童の中にも、計算問題は解けるが生活の中で使われるお金の計算は苦手という児童がいる。そこで、国語科のことばの学習やソーシャルスキルを意識し、日頃は個別学習に励んでいる児童に、班で話し合いながら楽しく学習できる内容を考え「買い物ごっこをしよう」という単元を設定した。

【指導観】

「買い物ごっこをしよう」の学習では、友だちの話をしっかり聞くことが苦手な児童も

がんばれるように、二つに分けた少人数の班の中で、店番の順番や店の名前について話し合いをさせたいと考えた。店の看板の準備の時も一人一役でできる活動を用意していくようにする。

なかよし学級には、学習教具としてレジスターや教材用のお金もあり、それに関心を示す児童もいる。買い物活動には自立した社会生活をしていく上で身につけていきたい活動が多く含まれる。そこで、お客と店員になって活動することで買い物活動への興味関心を高め、人とかかわるコミュニケーションの力を育むことにもつながると考えた。

また、話し合いの中で自分の意見や考えを伝えることが苦手な児童には、友だちの話をしっかり聞いたり、班の中で司会役を務めたり、役割の分担や準備の手順など話し合い活動をしたりとすることで、話をする事への自信や自己肯定感がもてるようにしたい。そのため、司会用の話し方の見本や意見の伝え方のメモを用意したり支援者が見本を示したりして児童が話しやすい環境を整え支援していく。司会役も順番にしていこうように配慮していく。

さらに、なかよしの学習園でとれたじゃがいもを、ポテトチップスにしてお店屋さんにする事で、児童が買い物ごっこを楽しく進んでとりくむ意欲付けになると考えた。じゃがいもの調理については事前に行うが、衛生面に配慮し学習内容にあわせて作る量は加減していく。

本時では、学習の始めに個別学習「わくわくチャレンジ」をし、そのあと「買い物ごっこをしよう」の活動をするように設定した。児童には、学習でやるということを意識させたいので「買い物学習をしよう」と提示していく。

3. 学習指導計画（全3時間）

次	時	学習活動	支援のあり方
I	1	○ 買い物学習をすることを知りそのやり方の説明を聞く。 ○ 店員とお客の言葉やお金のやりとりの練習をする。	・ 2つの班をつくりそれぞれのお店を自分たちで協力しあって準備することが理解できるようにする。
	2	○ 班に分かれ、店の開店準備に向けて話し合い活動をする。	・ 話し合いがスムーズに進行するように、司会役を決め進行表や伝え方メモを用意する。
	3	○ 店の名前や値段などを紙に書いて貼っていく ○ お店の準備をし、役割を交代しながら買い物活動をする。 ○ 買い物学習を振り返る。	・ 一人一役があるように活動内容を考え用意する。 ・ ルールや役割などを掲示し見通しがもてるようにする。 ・ 協力できたことを振り返り、みんなで活動する楽しさに気づかせる。

・ 買い物ごっこの概要


- ・ ポテトチップスのお店を2店開く。
- ・ 前半後半で店員とお客の役割を交代する。
- ・ ポテトチップス1枚10円。1回に3枚まで買える。
- ・ 買い物のお金は一人50円。
- ・ 両方のお店に買い物に行く。

4. 本時の学習

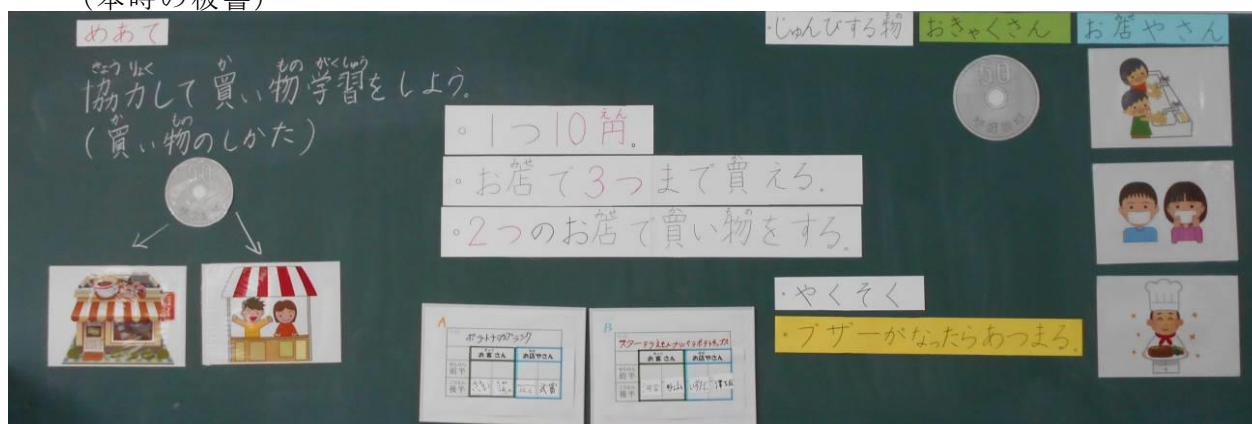
① 本時の目標

- ・協力して買い物学習の準備をすることができる。
- ・友だちの話をしっかり聞いたり、自分の考えを伝えたりすることができる。

② 本時の展開

学習活動	★発問 ◎助言 ○指示 ▼支援
<p>1. 個別学習をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「わくわくチャレンジ」に取り組む。 <p>2. 本時の買い物学習のやり方とめあてを確認する。</p>	<p>○「わくわくチャレンジ」の後「買い物学習」（準備・本番）することを伝える。</p> <p>▼それぞれに必要な声かけや支援をしていく。</p> <p>○買い物学習のやり方やめあてを全員で読んで確かめさせる。</p> <p>▼板書や掲示物を活用していく。</p>
<p style="text-align: center;">班で協力して買い物学習の準備をしよう。</p>	
<p>3. 2班に分かれ、話し合い活動をする。</p> 	<p>○役割をきめたり準備の仕事の分担を決めたりさせる。</p> <p>▼司会役には進行表を用意し話し合いがスムーズに進むよう支援していく。</p> <p>▼自分の考えを言葉で伝えにくいときは、書いて用意したメモを利用するようにする。</p> <p>▼友だちの話をしっかり聞くように声かけする。</p>
<p>4. 店の看板の準備をする。</p>	<p>▼必要な準備物を用意しておく。</p> <p>○店の名前、商品名や値段また広告などを書いたり貼ったりさせる</p> <p>○字は鉛筆で下書きしてからマジックで書くようにさせる。</p> <p>▼一人一役できるようにする。</p> <p>▼おつりを準備する。</p> <p>○自分の役割が終わったら、友だちのところを手伝ったり店を整えたり協力しあうようにさせる。</p>
<p>5. 店員やお客のセリフの練習をしたり、お金のやりとりの練習をしたりする。</p>	<p>▼セリフカードを用意しておく。</p> <p>○50円玉と10円玉で買い物のやりとりを練習させる。</p>
<p>6. グループで協力できたかを振り返り、次時の予告を聞く。</p>	<p>○グループ活動でがんばったことやよかったことを評価し次時の活動に意欲をもたせる。</p>

(本時の板書)



5. 指導を終えて

(1) 本実践の考察

本実践では児童の一人一人の発達段階やニーズにあわせて支援方法を考えるようにした。たとえば話し合いに慣れるために、まず意見交流を行った。そこでは、順に司会役を決め、進め方の台本を用意して練習した。テーマは「好きな食べ物」「乗ってみたい乗り物」など自分の考えを言いやすいと思えるものにした。質問されてすぐに答えるのが難しい児童の場合は、楽しく参加し進行がスムーズにいくように事前に、個別に質問して答えを考えさせ、発表できるようにした。「今から話し合いを始めます。きょうのテーマは・・・」など台本を見なくても言えるようになった児童もいた。その結果、本番でも台本のセリフカードがあることで司会担当の児童が自信をもって進めることができていた。

話し合う内容は、役割の順番と店の名前を決めることとした。記録用紙は磁石が付くホワイトボードに貼り、役割が決まったところに磁石の名前カードを置くようにしたので進行がスムーズにできた。(資料①) 役割の番が決まった時に役割の名前シールを服に貼るようにしたので、本人も周りも役割が確認できよかった。店の名前を決めるところでは提案された名前をつないで店名に決めている班があった。店名は少し長くなったがお互いの考えを取り入れてうまく折り合いをつけることができていた。一方の班ではじゃんけんで決めていた。

スタードラえもんアプリパラポテトチップス				
	きゃく お客さん		みせ お店やさん	
ぜんはん 前半				
こうはん 後半				

(資料① 記録用紙)



(資料② 看板書き)

看板書きでは、一人に一つ役割があたるようにした。どれにしようかとなかなか決まらない児童もいたが、やり始めるとそれぞれに宣伝文句を考えて書いたりマジックの色をかえたり楽しく活動する場面が見られた。(資料②) 文字を早く書き終えた児童には、挿し絵を描こうと声かけし、できた看板を四つ切の画用紙一枚にまとめて貼り、店用の机の前に掲示するようにした。

また、めあてに「協力して」という言葉を使ったが、「協力する」ということばがまだわかりにくい児童もいるので、「使うといい言葉」（あったか言葉）「よくない言葉」（ちくちく言葉）を伝えて、あったか言葉をいっぱい使おうと促した。（資料③）日頃は聞こえてくるちくちく言葉はあまり聞こえず、準備の学習の終わりで振り返った時も、児童の多くはがんばれたと挙手していた。

○	×
・ ありがとう。	・ ダメ！
・ 手伝うよ。	・ あかん！
・ 何かすることある？	・ やりたくない。
・ いっしょにしよう。	・ せえへん。
・ 弱かったよ。	・ いやや。
・ がんばってるね。	・ おもしろくない。
・ おしえてくれる？	・ やめる。
・ いいよ。	・ かてにしち。
・ それ、いいね！	

次時では、実際にポテトチップスを使い、お店を2店開き買い物ごっこをした。学習園で収穫したじゃがいもを当日の朝にスライスしてポテトチップスを用意した。食べることがメインではな（資料③使うといい言葉）いので、1枚10円一人5枚までと設定した。お客の児童が二つの店に買い物に行けるように1回に買えるのは3枚までとした。50円玉で始めることでおつりのやりとりもできるようにした。児童は実際にポテトチップスが食べられるということで、張り切って店員やお客の役に取り組む姿がみられた。室内に手洗い場があり、手洗いやマスク・帽子の着用もスムーズにできた。



（資料④店員の様子）

また、店員とお客のセリフカードやおつりの早見表も用意し、必要な児童の支援を進めた。児童はセリフカードを利用したり店員になりきってアドリブでお客の対応をしたりしていた。（資料④）また、見にこられていた先生方にも50円をもって買い物に参加していただいた。「5枚ください」と言われて「3枚までです」と返事したり、「おまけして」といわれてサービスしようとしたり、マニュアル以外のセリフにも上手に対応している児童も見られた。日頃は同時に8人で活動する機会が少ないので児童にとっては貴重な交流の場にもなり、いつも以上にコミュニケーションの力を育むよい機会とすることができた。

本実践は3時限目4時限目と続けて行った。休み時間は確保して取り組んだが、おわりの反省のところで集中力がきれてきた児童がいたが、最後までよくがんばっていた。

6. 成果と課題

- 準備で司会のやり方を練習したり挙手をしたりじゃんけんをしたりメモを用意したりすることで、どの子も参加することができた。
- 話し合い活動や買い物ごっこなどのいろいろな場面で人とのコミュニケーションの場ができ交流することができた。
- 協力する時に使うといい言葉を意識させ、友だちと一緒に楽しく活動することができた。
- 文字や数・お金の計算、対人関係などそれぞれのニーズにあった活動をすることができた。
- ▲ 振り返りのところで意見を言えずに終わってしまった児童に対して、意見を引き出す手立てが必要だった。
- ▲ お金の計算や対話の力など児童によって課題が違うので、一人一人どの課題に重点をおいているかを明確にし、それぞれのニーズにあう対応をさらに考えていく必要がある。
- ▲ 机に座っての個別学習とともに、話し合い活動や体験型学習など小集団での活動を今後も進めていく必要がある。

進行表

①今から話し合いをします。

②まず、お店屋さんとお客さんの前半・後半を決めます。多かった場合はじゃんけんで決めます。それぞれ、2人ずつしかできませんが後で交代します。

③前半（さいしょ）にお店屋さんをしたい人いますか。

④前半（さいしょ）にお客さんをしたい人いますか。

⑤決まったものを表にまとめます。

⑥確認します。前半にお店屋さんをする人は手をあげましょう。

⑦前半にお客さんをする人は手をあげましょう。

⑧協力して、買い物学習をしましょう。

①次は、自分たちの店の名前を決めます。

②どんな名前がいいですか。

③一人ずつ言ってください。理由も言える人は言いましょう。

④では、〇〇さんは店の名前は何かいいですか。

⑤次、〇〇さんは店の名前は何かいいですか。

⑥次、〇〇さんは店の名前は何かいいですか。

⑦ぼくは（も）、店の名前は「 」がいいと思います。

⑧この中でどれにしますか。

⑨意見のある人は手をあげてください。（手があがったら） 〇〇さんどうぞ

⑩では、このグループの店の名前は「 」になりました。

⑪よろしく願います。

①次は、お店のかんばんを作ります。書くことは、決まったお店の名前・ポテトチップス・ねだん・お店の広告です。1人1つ書いてもらいます。

②1人1枚紙を選びましょう。

③えんぴつで下書きしてからマジックで書きましょう。

④早く書けた人は色をぬったり絵をかいたり工夫しましょう。

⑤準備の時間は5分間です。

⑥何か質問はありますか。

⑦では、始めましょう。

セリフカード

セリフカード
(ポテトチップスをわたす人)

①いらっしゃいませ。

②いくつにしますか。

③〇〇つですね。

④はい、どうぞ。

セリフカード
(レジの人)

①〇〇つで〇〇円です。

②50円おあずかりします。

〇〇円おつりです。

③ありがとうございます。

④また、おこしください。

セリフカード
(おきやくさん)

①ポテトチップスください。

②〇〇つ ください。

③ありがとう。

④50円でお願ひします。



〇〇円でお願ひします。

⑤ありがとう。

前半・後半の紙

(店の名前)				
	きゃく お客さん		みせ お店やさん	
ぜんはん 前半				
こうはん 後半				

料金早見表

料 金 早 見 表			
	10円で もらう時	50円でもらう時	
1つ	10円	おつり 40円	
2つ	20円	おつり 30円	
3つ	30円	おつり 20円	

V まとめと今後の課題

以下の点に児童の高まりを見出すことができた。

- 学校全体で話型とハンドサインを統一した。学年が進んでも、話し合いのルールや話し合いの進め方が継続していくことで、話し合いに抵抗なく参加することができた。また、それにより、互いの意見の違うところや同じところが明確になり、全体交流の場でも、活発に意見を交流することができた。また、ペアトークでの交流の仕方のルールを設け、それを指導していくことで、ペア内でも教え合いがあったり、自他の意見の共通点や相違点に気づきやすくなったりした。
- 1年生のボーン図、2年生のYチャート、5年生のXチャート、6年生のコンセプトマップなど、シンキングツールを使う学習に取り組んだ。これにより、文章の順序や構成に気付くことができたり、分類して自分の意見をまとめたり、情報を関連付けて構造化したりするなど、自分の考えを「見える化」することができた。その結果、自信をもって自分の考えを表出することができた。
- 児童の興味関心を高めるために、学習計画を工夫した。1年生の「のりものブック」2年生の「どうぶつのひみつブック」、3年生の「かくし絵事典」、4年生の「筆者の技探し」、5年生の「ブックトーク」、6年生の「REC」など、児童が「自分もやりたい」と意欲をもって活動することができた。
- 常に本文に戻って考えるようにすることで、児童は、本文の言葉をじっくりと読み、内容を共有することができるようになってきた。また、児童は、本文の言葉を根拠とし、理由をつけて考えを述べるようになってきた。このような力は、他の学習場面にも広がりが見られるようになった。
- 毎時間の終わりには、自己評価を行うようにした。自己評価を指導者が見ることで、評価の低い児童に対しては、個別に指導をするなど、指導の手掛かりとして用いることができた。また、個別に声掛けをすることにより、自己評価がよくなってきた児童は、より意欲的に学習に取り組むことができた。

今後の課題は、次の2点である。

- 図書が計画的に活用できるよう、各学年で計画を立てたが、児童にとって扱いにくい図書もあったので、どのような本を、どう読ませていくのかという点について、さらに検討していく必要がある。
- シンキングツールの活用により、自他の考えを可視化し、意見をしっかりと把握できるようになった。これからも、他の教科や他の単元などで、活用できるように有効な活用の場の開発に取り組む。